



新後撰和歌集  
下

新後撰和歌集  
上

特別  
A4  
8099  
13





Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or letter. The text is written in a dark ink on aged, yellowish paper. It consists of several lines of text, with some characters appearing to be in a different script or dialect. A red square seal is visible near the bottom center of the page, containing characters in a stylized font.



新撰撰和歌集卷第一

春并上

少きよままだらりうら白く見ゆけり

前大納言為氏

よ不始の勢乃とる色冬くけて書きあはるる春はふら

道助は親まの家や中首あまの多ふ初まはる

常盤井入道前大納言

少書はとてはつた方此をいふもあまきやまはる

和ら良

後一条入道前白左大臣

春はひかかるとるあまの夫乃若下まのあはる

從二位家隆

唯まをたらくかたの心とらるるあまのあはる

久安六年宗徳院の百首歌なりやう

藤原清輔朝臣

流かたうとぬまらむ若れいとほりあまを因り

寶治二年後醍醐院の百首歌なりやう

霞

并内侍

よとあまの心とまきとぬと若やまの心とらるる

春風ま水一時来るとるあまのあはる

土御門院沙羅

時とあまの心とまきとぬと若やまの心とらるる

若前百首歌なりやう



正三位知家

はらわく定正は棟の若狛川守を以てりきやとて後

初春の心

院御掣

きやとて若狛川守を以てりきやとて後

春はあけぬ

前中御言定家

きやとて若狛川守を以てりきやとて後

久安百首歌集のりやうり

左京大夫源輔

らそひを春らそひを春らそひを春らそひを

百首歌集のりやうり

後鳥羽院御掣

きやとて若狛川守を以てりきやとて後

道助造親王家中首より雪中篇

藤原信實朝臣

きやとて若狛川守を以てりきやとて後

建長六年三首より合し篇

山階入道左大臣

きやとて若狛川守を以てりきやとて後

山家集より

源後頼朝臣

きやとて若狛川守を以てりきやとて後

當と後頼朝

源連法師



高倉の文河のさねり文子の文子記すのりひのり  
弘長元年後漢成院の百首言なり其の春書

前大御言存家

まのさけの春書なりびらひををらるる春の書なり  
神ら次 大上天皇

まのさけの春書なりびらひををらるる春の書なり  
式部院院連

高倉の文河のさねり文子の文子記すのりひのり  
從二位家隆

わりの春書なりびらひををらるる春の書なり  
餘寒の冬

前大御言存家

山河の春書なりびらひををらるる春の書なり  
春あり中に

後京極権政前大政大臣

萬の春書なりびらひををらるる春の書なり  
百首言なりびらひををらるる春の書なり

入道前大政大臣

海の春書なりびらひををらるる春の書なり  
春あり中に

前大御言存家

まのさけの春書なりびらひををらるる春の書なり  
皇若菜也

前大御言存家

わりの春書なりびらひををらるる春の書なり  
皇若菜也



寶治三年後漢誠院百首歌の昔討澤の業

前大御言為氏

里合山御歌のさしあけの白りよの御歌

年内侍

袖のし物御のあし歌のさしあけの御歌

百首のさしあけの御歌

二品法親王尊助

美はあやの御歌のさしあけの御歌

初若業也

前中御言定家

新だらりの御歌のさしあけの御歌

百首のさしあけの御歌

法皇御歌

山嵐の御歌のさしあけの御歌

以長元年百首歌のさしあけの御歌

毎登前由之旨

美はあやの御歌のさしあけの御歌

以安元年百首歌のさしあけの御歌

前桑後雅有

美はあやの御歌のさしあけの御歌

文永二年七月白川石の御歌のさしあけの御歌

美はあやの御歌のさしあけの御歌

前大御言為家



中乃海や平ら見てふ海を越えたりと云ふ世は  
頼朝院御製  
頼朝院御製

建長二年百首言をけり時嘉  
おと油言為氏

建長二年詩言を合もいり時  
冷泉太政大臣

百首言をたまり時嘉  
権中油言云権

苗乃わかきあつたをけりあつたをけり  
河原とつるあつたをけり

あつたをけりあつたをけり  
入道前太政大臣

あつたをけりあつたをけり  
鷹司院屏風に

あつたをけりあつたをけり  
高倉院位とむし



梅を詠むる詩の巻

白雲の后又之を落成

九等に向ふをよめる梅を詠む此本十卷の巻末に

文治五年女侍入由屏風

後醍醐天皇御前

ひの枝のりぬきをさすふ宿の本を程のり

今上御親りよる御前に梅

今上御製

本城よりよる梅を詠むる風を詠むる梅を詠む

百首ありし梅

藤原為教御製

ゆきを詠むる梅を詠むる梅を詠むる梅を詠むる

建長五年二月の合の巻

少将御侍

梅を詠むる梅を詠むる梅を詠むる梅を詠むる

法皇御製

梅を詠むる梅を詠むる梅を詠むる梅を詠むる

光厳天皇御前

正三位御製

梅を詠むる梅を詠むる梅を詠むる梅を詠むる

閑踏御製

前大僧正御製



かたがたのあはれまにさあなり実の如くそはかたがた

去秋の中ふ 藤原の院中將

わさそはらひらけさやかほひんるる松をさ春の如く  
文永三年七月白河の如くをさそさうりて七百そ  
まつうまうのうらつ井に花下忘ぬといふ事也

後醍醐院御製

名前の家物よりそはあらすはれなるまのかりそ  
弘長元年百首あはれそはれり春の雨

前大田言為家

そとより此袖をりあはれす風たさうりてまふを  
建暦二年内裏詩予命

糸織雅經

まきそと難はほえひをさる梅の如くあはれ  
題不知 衣笠由之信

春の如くそはれりあはれすまふは日蓮  
西行法師

并歸山人あはれりあはれりあはれりあはれりあはれり

後法皇の入道開白右大臣の如くあはれりあはれり  
よあはれりあはれりあはれりあはれり

後法皇寺友之信

あはれりあはれりあはれりあはれりあはれりあはれり  
待れといふ事也 前開白右大臣



あつあつを乃公候方くさあはあうけしをききあ  
きりきり乃廿日御まりのは西に候えせと云  
され伊まこのまの候うけしをけり

從三位頼政

後いふまのたおまの親の信をそあつさるを  
や

小侍從

か事しつるけりきり信屋のをそあつさるを

雪中花

前大納言良教

ついで親の志をいしそけりきり親乃をそあつさるに  
此安を子百首あつさるをけり

前中納言為兼

山橋を雪よりかつるや親もかけくあつさる風

院まののあつさる時三首あつさる雪間山花を

大納言陸博

まされつるたの橋もあつさる親のまをそあつさるを

春考の中に

前用白木政之臣

みさしたのれもや信をたつさる親のまをそあつさるを

中務卿宗考親王

なとふ親をたつさる親のまをそあつさるにあつさるを

中務卿宗考親王御所合小親

前系後純清

雪やふれけり山より雪をそあつさるをそあつさるを



雲居寺乃花夕之さう梅窓使隆衛  
ちうのむらとを恨けしはつとてけり

西園寺入道前太政大臣

けりまのむらとを恨けしはつとてけり  
梅窓使隆衛

かみじのらむを恨けしはつとてけり  
梅窓使隆衛

子あ百番年合

後二位家隆

かみじのらむを恨けしはつとてけり  
梅窓使隆衛

新後撰和歌集卷第二

春并下

以長元年百首あやけのつ花

常盤井入道前太政大臣

あやけのつ花を恨けしはつとてけり

正治二年百首あやけのつ花

藤原隆信朝臣

あやけのつ花を恨けしはつとてけり

天長元年百首あやけのつ花

太上天皇

あやけのつ花を恨けしはつとてけり



前大御言為氏

山階入道左大臣家十首言久約言言言  
つる言を  
あぢ政大臣

厚めり厚言言言言言言言言言言言言言言言言言言言言  
山階山言言言言言言言言言言言言言言言言言言言言

今上御製

く野山言言言言言言言言言言言言言言言言言言言言  
百首歌言言言言言言言言言言言言言言言言言言言言

前開白太政大臣

言言言言言言言言言言言言言言言言言言言言

天台座主道玄

言言言言言言言言言言言言言言言言言言言言  
言言言言言言言言言言言言言言言言言言言言

平貞時朝臣

言言言言言言言言言言言言言言言言言言言言  
言言言言言言言言言言言言言言言言言言言言

式乾門院清運

言言言言言言言言言言言言言言言言言言言言  
言言言言言言言言言言言言言言言言言言言言

万里小路右大臣

言言言言言言言言言言言言言言言言言言言言  
言言言言言言言言言言言言言言言言言言言言

山階入道左大臣



嵐のふりておける妙乃木のすゝめはつとらあり  
手書あまの命 堤二位家隆

そとら白くはらふにさらねらむとそ書あまの命  
人いひ書あまの命 丁井の歌

古上天皇

夕風をむすまねむの帯にそと七橋をゆををれ  
位にたもしく多討うぬれあのことと花威ををぬ  
事とつとくはひりまぬに丹てふ

院法製

つららとらぬ白鳥をかたはらぬ重乃宿のさくら  
院法中に 前開白古政大臣

わとねしむの書かひけとまはれおれおれ  
院中御言云雄

まぬあつらふ心名のたみともむとまはれおれ  
二十首歌もせけつと討見歌

新院法製

ぬまのまふおれゆかむかふかふかふか  
弘安元年百首言たてまらりて

前大御言長雅

とらたれゆてそらあまのまのこふおれ  
山花似書とららるん

前大御言兼宗



く指し教らるるは是れもまた其の如き事なり  
高僧の道前極政家の事合し雲間乳

藤原光後朝臣

藤原光成の事此はたゞとて外よるを其の如き事  
守覚は親王家の事首言ふは其の如き事

宗蓮法師

本朝の如き事此はたゞとて外よるを其の如き事  
其の如き事此はたゞとて外よるを其の如き事

前僧正云朝

其の如き事此はたゞとて外よるを其の如き事  
其の如き事此はたゞとて外よるを其の如き事

西行法師

わが路の如き事此はたゞとて外よるを其の如き事

刑部卿頼輔

梓弓の如き事此はたゞとて外よるを其の如き事

從二位頼朝

山崎の如き事此はたゞとて外よるを其の如き事

空海を十首言合小山花

前大御言為家

其の如き事此はたゞとて外よるを其の如き事

後鳥羽院上野

其の如き事此はたゞとて外よるを其の如き事

行中御言為家定



尋てみよはたの杖をむらもをて程程はう

後意程程改前意改言

都の勢はまにあつらんをふりて意程程はう

権中納言長方

とて程程の心程程と程程の心程程

後意程程改前意程程改言

けつとまゝにしてすゝあゝとて程程の心程程

前中納言定家

え程程の心程程と程程の心程程

白のそらとて程程の心程程

後意程程

ゆびと程程の心程程と程程の心程程

花苗客といふ事と

隆信朝臣

き程程の心程程と程程の心程程

程程の心程程と程程の心程程

さ程程の心程程と程程の心程程

白のそらとて程程の心程程

前中納言為世

ま程程の心程程と程程の心程程

山家花と

さ程程の心程程と程程の心程程



津守国助

朝人あまたつふし雲の如く朝のあけをすまは  
花下惜友とつるうらや

祝部威成

ふとこむきとや今ちほもいふは雲の如く  
神の旨

信實朝臣

すくもみんはのこむきとや今ちほもいふは雲の如く  
月夜に院

わすすくもみんはのこむきとや今ちほもいふは雲の如く  
前大御言為家へい百首言ふ久行けりふ

藤原門院十将

わすすくもみんはのこむきとや今ちほもいふは雲の如く

春言中

鎌倉右大臣

わすすくもみんはのこむきとや今ちほもいふは雲の如く  
いふは雲の如く

前大御言為家へい百首言ふ久行けりふ

いふは雲の如く  
神の旨

信實朝臣

いふは雲の如く  
西行法師

いふは雲の如く

順徳院法皇



春の日は花をいそぐとすも物も春共と行らば春乃よ

春夜并入道前上詠言

春夜平下らるる春の心花のつらとあはれし吹雪

百首歌よませし守り花

法皇御製

春風よきわが花のあはれをさるゆすれ宿るを

花守中記

藤原為道の言

ゆつとせとあはれを吹くはるも春風を

由兼の百首言をよむ折花

右大臣

こころを花のいそぐと梅の花折花のつらと

花

花原為景の言

今うらと梅の花折花のつらと春風を

花守中記

久安の言

花のあはれを吹くはるも春風を

久安百首言をよむ折花

左京大夫の言

余をさるる花のあはれを吹くはるも春風を

皇太后文太后の言

ゆつとせとあはれを吹くはるも春風を

花守中記

前僧正の言

あはれを吹くはるも春風を



遊義門院

わたらぬ新をともそ懐衣にほふとゆき金言乃風ふ  
由雲の百首言まひりし時落衣

遊義門院行大御云

くも風をそよそゆきをゆらりし衣をよそふ  
以安元年百首言まひりし時

典侍執子朝臣

予おと風吹とに恨とを衣をよそふおぼりし  
細院権政家の百首言まひりし時

皇太后后文治後成安

昔きそははりおとそふの衣をよそふしちりし時

平らる

前内大臣實

わたりやうは衣をよそふしちりし時  
正三位經朝女

春よは衣をよそふしちりし時  
源兼成朝臣

朝のちよそふしちりし相好の雲ふしちりし時  
正三位重成

籠りたる衣をよそふしちりし時  
正治二年十首言まひりし時

前大御云忠良

みよは衣のよそふしちりし時











と事どもうとてのりなり

前大御云為世

中興をまつあしを言ての言はるるあつた

後京極権政家六言番方合

堀二位家隆

おん御の本すゑに私をて言はるるあつた

言言此を

ぬ御法師

言ての言るるあつたを私に言はるるあつた

前大信正隆并

言ての言るるあつたを私に言はるるあつた

後醍醐院法皇

くねの言るるあつたを私に言はるるあつた

西院法皇時百首方たてしはのりなり

持大御言云實

くねの言るるあつたを私に言はるるあつた

あつた











平時村朝臣

平氏より公を中へ移し、其の事ありし時、  
兼光元年内裏より命、曉部と

前中油言定家

時、所より出たり、宇佐重久、けしき、  
洞院朝政家、百首より、

康隆門院十将

公より、公より、部を、  
夏より中へ

平宣時朝臣

平氏より、公より、  
道助は、執事家、

法印覺寛

約令より、公より、  
以長元年百首より、

從二位約家

わが山より、公より、  
藤原隆祐朝臣

藤原隆祐朝臣

公より、公より、  
後法行より、

形方十将

公より、公より、  
平氏より、

平約氏



つふれがらん 獲まゝ 討まき 討まき 討まき 討まき 討まき

後三年首首なり 討国部

入道前太政大臣

美濃のふたつは 討まき 討まき 討まき 討まき 討まき

河原橋政家 百首なり 討まき

前大納言 為家

美濃のふたつは 討まき 討まき 討まき 討まき 討まき

河原橋政家 百首なり 討まき

中納言 定家

美濃のふたつは 討まき 討まき 討まき 討まき 討まき

河原橋政家 百首なり 討まき

美濃のふたつは 討まき 討まき 討まき 討まき 討まき

中納言 長房

美濃のふたつは 討まき 討まき 討まき 討まき 討まき

時鳥河方 討まき

法平 長兼

美濃のふたつは 討まき 討まき 討まき 討まき 討まき

河原橋政家 百首なり 討まき

美濃のふたつは 討まき 討まき 討まき 討まき 討まき

源後頼朝 討まき

美濃のふたつは 討まき 討まき 討まき 討まき 討まき

河原橋政家 百首なり 討まき



嗚呼とてまはしのけく路をみだたらふり出の處

子百首會 巨秋門院丹後

郭を千穂とあらわすまゝとて移し乃月を巻

夏年中に 前左兵衛督教定

まをまの巻ありて是れ時多まを移しあまの合とて望

古治親王

郭を千穂とあらわすまゝとて移し乃月を巻

後三位氏久

郭を千穂とあらわすまゝとて移し乃月を巻

祝部成仲

郭を千穂とあらわすまゝとて移し乃月を巻

後人

郭を千穂とあらわすまゝとて移し乃月を巻

寶治百首歌をすまひては國郭を

前大納言基良

時多まを移しあまの合とて望

弘安元年百首歌をすまひては國郭を

赤大納言之良教

我國をばらちかすの時多まを移しあまの合とて望

神子内親王

ひりや歌をすまひては國郭を

入道大納言之良



有まのをたのむるや

前用白太政大臣

我らとていふと

皇太后宮太后

憐れあはれ花より

久安百首

大京大史

かきよめと

中宮

中宮

あけをみよ

遊義門院

あはれたが

新大御

あまの

長

信実

あまの

前大御

あまの



新ふ心

藤倉右左衛門

新ふ心はけしむ子孫の長ちる所のこゝろに  
初めはむとふ事な

後を承け侍奉

お月夜はこもおまを此見今よのけしむ心は  
前大御言為家この百首歌

信實朝臣

山は輝く水のみを此子を母をわらへ今よのけしむ心は  
夏衣は中の

後二位為繼

若らるの御さちをこの御言を此の御言を  
只女への百首言をまかりし

前大御言為家

御言を此の御言を此の御言を  
河内守とふ事な

藤原為信朝臣

お月夜はけしむ子孫の長ちる所のこゝろに  
前大御言為家この百首歌

後二位為繼

お月夜はけしむ子孫の長ちる所のこゝろに  
兼暦二子由裏は番言合しお月夜とふ事な

前中御言為家

お月夜はけしむ子孫の長ちる所のこゝろに  
お月夜はけしむ子孫の長ちる所のこゝろに



守貞は親王家の中首方

従二位家隆

そののちの世に女をとりむるを此の日の世

評らる

康慶門院少将

山内朝宗の世に世をてるを此の日の世

保兼氏朝臣

有る入る世の事とて世を此の日の世

祝部成久

その世に世を此の日の世

源俊定朝臣

凡そこの世の世を此の日の世

衣笠内大臣

その世に世を此の日の世

若人言すける侍 前中御言定家

蓋ふ世の世を此の日の世

中院道右大臣家光水鏡朝臣

道因法師

夏の間を此の世に世を此の日の世

評らる 法性寺道前開白大臣

有る世の世を此の日の世

前大信正守言

の世に世を此の日の世



後之為者乎前修及た其旨

から火のむらとよみく成るる田上川乃ゆめめれり

前大御主為家

月をて新川をむらかり火をむらうるむらむら

百首歌をりーそれ夏月

後大御主言典侍

ひのあまをむらめて月影のすくむらむらむら

水も夏草といふこゝろあり

右貞秀茂

志のむらむらむらむらむらむらむらむらむら

夏草の中

山階入道とて其旨

ふむらむらむらむらむらむらむらむらむら

藤原門院十将

むらむらむらむらむらむらむらむらむら

若原宗徳

むらむらむらむらむらむらむらむらむら

鷹司院梅実

むらむらむらむらむらむらむらむらむら

昨夜曇り

左兵衛尉信成

むらむらむらむらむらむらむらむらむら

むらむらむらむらむらむらむらむらむら

安部門院三條



能くまきりたるのまことほむるはまのしるし

建長三年秋刈田とて入つてつうはひのまらふ

後法親院法親

つらに形海とてのまらふまにあらひりくわをん

神くろく 前中油之後光

又書とてのりともあく本れたるまのまらふ

あ系秋之後

夏まのまけはまらふまらひりくわをん

瞿麦草とてのりくわをん

由之旨

すの草のつらまの風をまらふまらふまらふ

後三首まらふのつ樹陰油涼

入道前太政大臣

すまらふまらふまらふまらふまらふ

百首まらふのつらまらふ

前中油之為賢

あ風ゆかひまらふまらふまらふまらふ

あ安元年百首秋まらふのつらまらふ

あ大油言為氏

夏まのまらふまらふまらふまらふまらふ

千五百番まらふ

後法親院法親



いづれかそは風を吹きよる者すもき皇の命乃れ

新らる

後徳治の末に

むす此新すの山の新けしき事とらふ水の源と

平貞時朝臣

あそ新じきむせり月新すもろつる方井塔

中書省の事

惟明朝臣

新けり志井の源又書とすの福人々や地をま

水月如秋といふ事

前太師の源房

水乃実とす月新の源とる名を林のかしむる

新らる

後九條の末に

う新あたきの新源とすもろつる方井塔

新らる

*[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]*



新漫撰和歌集卷第四

秋奇上

守覚法親王家平一首に

前中納言定家

あきこの栂はをき風うもさきのあはれ秋のうら風

久安百首あに秋のうらめれあ

左京太史顯輔

あきこの栂はをき風うもさきのあはれ秋のうら風

秋奇上

後醍醐院の歌

あきこの栂はをき風うもさきのあはれ秋のうら風

前参議雅有

あきこの栂はをき風うもさきのあはれ秋のうら風  
洞院権政家の百首秋と早秋

後九條田上

あきこの栂はをき風うもさきのあはれ秋のうら風

秋風告秋といふ事と

前中納言為兼

あきこの栂はをき風うもさきのあはれ秋のうら風

秋奇中

藤原隆福朝臣

あきこの栂はをき風うもさきのあはれ秋のうら風

山階入道友房家の十首うら初秋歌

侍従云世



まはるる露を何れもあてはへてはと油り好まらるる

神々

左近中将具氏

かゝるは月日とてあまの山をてきたりちきり記ん

常盤井入道前太政官

約さるるをいひてはかたよりいふの如く

雅成執事

空をたふさぐとてはまの山をてきたりちきり記ん

空をたふさぐとてはまの山をてきたりちきり記ん

直秋門院母後

銀のわさき葉にたのめとてきたりちきり記ん

七つたのめとてきたりちきり記ん

近侍

たのめとてきたりちきり記ん

前太師長雅

かゝるは月日とてあまの山をてきたりちきり記ん

将中油言云

かゝるは月日とてあまの山をてきたりちきり記ん

高治執事

まはるる露を何れもあてはへてはと油り好まらるる

七月七日内裏に七首言たてまつり侍

前太師長雅

かゝるは月日とてあまの山をてきたりちきり記ん



後京極務政家六百番乃奇合ふ

前中御言定家

秋の心平し早あへのさ彩多てひりそるるる是れ

古く

新院御製

梅風と春の心平し早あへのさ彩多てひりそるるる是れ

春宮女史通重

ひの星其舞をそまあ枯れても秋かきひりそるるる

百首歌たてまつりて七夕

藤原為相御製

かろふと袖の春の心平し早あへのさ彩多てひりそるるる

後鳥羽院御製

おほはれはのさ彩多てひりそるるる

春日社とあてまつりて七夕

前中御言定家

秋風と春の心平し早あへのさ彩多てひりそるるる

秋の心

有原伊信御製

さの心と秋の心平し早あへのさ彩多てひりそるるる

山階入道元吉家乃十言の閑居秋風

三條入道御製

かろふと袖の春の心平し早あへのさ彩多てひりそるるる

秋の心

信白御製

秋の心と秋の心平し早あへのさ彩多てひりそるるる



老翁著る入道前信政家秋の三十首言中

年由約

わてら秋のそ風をよむまきぬかとのそ梅のそ業

秋言中

西行法師

にきるを風はすそ中風の時とていふるそちかふれ

政安八年八月末書三十首言たまふり時秋言

津守国助

垣りり秋のそけいそつらひそとらぬけいそ梅のそ風

秋言中

平好氏

かきそくふ似りり秋のそ業をよむりとのそ秋風

平宣時朝臣

平秋風言そとらるる庭の梅芽の露とそそん

の首言余小野外秋風

前中御言後定

あかたの秋風をわそらにそとをそとあそとけ梅風そ

正二位隆教

かきそくちかそとそとそまの露とわそそ秋風

藤原為光朝臣

夕暮のわそらの秋風そあそとそけそれ秋風

建長三年の月十三日言余小出家秋風

後醍醐院法皇

山ゆりそそ秋風をわそらにそとをそとあそとけ梅風そ



名は百三三の字をいじりてある所

前中御言定家

おろけの思ふ事言はれは此の里の志をいふ所を

群ら

今上天皇

とれをいふ事言はれは此の里の志をいふ所を

入道前右大臣

おろけの思ふ事言はれは此の里の志をいふ所を

式乾門院侍連

おろけの思ふ事言はれは此の里の志をいふ所を

今上御言定

二條院禪院

おろけの思ふ事言はれは此の里の志をいふ所を

群ら

今上御言定

おろけの思ふ事言はれは此の里の志をいふ所を

鎌倉右大臣

おろけの思ふ事言はれは此の里の志をいふ所を

土御門院侍連

おろけの思ふ事言はれは此の里の志をいふ所を

今上御言定

惟の親王

おろけの思ふ事言はれは此の里の志をいふ所を

百首言定

天台座主道玄

おろけの思ふ事言はれは此の里の志をいふ所を



三十首方ませの草花露

新院法製

又著は新院十卷の露也子ひるまの露風う吹

光後相言信言新のくををらゆらる三十首露

中に 後二位の家

冬れ新院吹きたるま此に新院うたの露をいひく

弘長元年百首歌をもりきりされ傳

常盤井入道前太政大臣

孫乃入時の子にりてそ神のわざを余き風吹

秋文集中に 入道親王道覚

新院は露乃露の女良むをてあこき新乃又著

よかんくく

わさのいひん乃時の子をうまてうあわさくをの露

建長三年九月十三夜十首方合小相草花

冷泉太政大臣

約まの形系志のう分さひつらあひの露

新と 仁和寺二宗親王守貞

あゆはるたなをうたはる我さう野の露むす

百首方ませの草花露

法皇法製

いふたれをゆきかたをの露あきる露のよをき

行史ゆ云云



そらひつる勢乃難の如く、  
そらひつる勢乃難の如く、

平親清女

民部卿資宣

この書も、  
この書も、

平親清女

その書の、  
その書の、

或部々

そく、  
そく、

瑞々

そく、  
そく、

そく、  
そく、

そく、  
そく、

そく、  
そく、

そく、  
そく、

前々

そく、  
そく、

そく、

鷹目院

そく、  
そく、

惟宗忠景

そく、  
そく、

院々

入道

そく、  
そく、



建長三年九月十三奉十旨の旨を言ひ申

後醍醐院法皇

書り申上り候へども御座り候と申す事

兵部少輔親

之を以て御座り候と申す事

百箇の旨を言ひ申

律守國冬

都より初め申上り候と申す事

兵部少輔親

之を以て御座り候と申す事

建保三年丙寅の旨を言ひ申

信實朝臣

此の旨を言ひ申す事

御座り候

前系親雅有

之を以て御座り候と申す事

後醍醐院法皇

此の旨を言ひ申す事

文永二年九月十三奉の旨を言ひ申

兵部少輔親

之を以て御座り候と申す事

此の旨を言ひ申す事

御座り候

西行法師



唐のひまきといふをすじのさうきふいひ

群らるる せんくす寸

うらひのわつあひひのりく言ふたひわりの唐の唐

百首あそをまうりーそれ秋の唐

昭慶門院一条

そつてねすはく地と榊麻の勢きろさうとねりく

秋のうちに 從三位氏久

山をいもあひ月の出座てまうりあひのりさうはく

中務の宗号親王

小新原の心の勢乃あまきせと孫とせと唐の唐と唐

法眼慶軒

同すまをたつと唐の唐とあてまうりけりさうあひの勢

田家麻と 平時村朝臣

とあつて地といさく山田の唐の孫さあは唐のあひ

群らるる 清浦朝臣

ねりまのりつと地と唐のひと唐のあつてけり孫さあひのり

竹中ゆき云雄女

あひひさたつれあひけりさうと唐の唐のあひひ孫さあ

鷹司院卿

あつてまを井さあひふたさまをさうと唐の唐のあひひ

土御門院以教

敷物やあひあてさう唐の翅あひたすあひ月け



夜笠内上旨

のてんてん并の存の勢うとわいの勢いなる月々  
に長えは百首言をけつとて霧

吉野井入道前太政大臣

のりてをみおれたせ舟より河勢乃るより清り

秋方中旨

七御門院以製

かきゆいの勢うなる勢いなるを所なるたき

法下定旨

わすれ信りその言をたしとて勢いの守持乃風

入道前太政大臣

たき霧乃るなるをよわわとていさなる勢乃風

藤原泰宗

霧乃る深なる里は木のたにをきとて女子首親家

月方中旨

深兼氏朝旨

出おきて光は控そまき風乃海に書えてお山端折

若良為道朝旨

くぬ月まらつらつふたにまゆふの勢乃風

太政大臣

ふたのよき雲はひらひらとて勢乃る勢乃風

秋方中旨

中務少輔朝旨

雲乃る勢乃る勢乃る勢乃る勢乃る勢乃る勢乃る

順徳院御製







新撰撰和歌集卷第五

秋并下

此安元の百首あつたてまつりし時

入道前太政大臣

わきをねむりせむるは月乃かほりの里に秋風を吹

中御言家成歌并合し

刑部卿範兼

わさりの思懐を秋の朝をみゆ月の影をのけと

文永二年九月十三日中御言あ合し行月

光後朝臣

この瀬川共ては浪のせむりもはわさふすら秋の朝月

同六年九月十三夜白のぬく首あ合し河好院月

前右大臣藤原為教

秋の朝月をねむりすゝるまきれもかほりぬしの水

信平 眞実

まきれつゆをさへむと白川のそられきりてすゝる月影

秋の朝

信眼源兼

よみ海や秋の朝月影をさへむと白川のそられきりてすゝる月影

院大御云典作

秋の朝月影をさへむと白川のそられきりてすゝる月影

あまの首あ合し

從二位家隆

すゝる月影をさへむと白川のそられきりてすゝる月影



文永七年八月十八日由裏大首言ふ

前大御云具房

雲々毎々此人の境凡々を内けく此の月日

用月といふこと 後醍醐院法製

今ある月日とて此の境の境ありてはまを言ふ

建長三年九月十二日十首言合と名首月

前大御言資季子

清光の言言ふ此の境凡々を内けく此の月日

海月といふ事とてまを言ふ

今上法製

此の境凡々を内けく此の境の境ありてはまを言ふ

前大御言資季子

前大御言資季子

此の境凡々を内けく此の境の境ありてはまを言ふ

津守國冬

此の境凡々を内けく此の境の境ありてはまを言ふ

文永七年八月十八日由裏大首言ふ

前大御言資季子

此の境凡々を内けく此の境の境ありてはまを言ふ

同院橋政家乃百首言ふ月

前大御言資季子

此の境凡々を内けく此の境の境ありてはまを言ふ



建仁元年八月十八日  
皇太后文正皇后崩  
八月十八日

八月十八日  
八月十八日

津守國助

海邊月  
八月十八日

八月十八日  
八月十八日

中油言國信

八月十八日

八月十八日

中油言國信

八月十八日

中務卿宗尊親王

八月十八日

前僧正云胡

八月十八日

中油言國信

八月十八日

中務卿宗尊親王家の事



前系後継情

秋の心腹承乃存の事り秋の心腹承乃存の事り  
又承乃存八月十八夜和言市橋言合と田家見月と  
事也秋の心

方まゝいふうらひつわと秋の心腹承乃存の事り  
子あ百番言合と 後言和言市橋言合

と田の心腹承乃存の事り八月十八夜和言市橋言合と田家見月  
建仁寺八月十八夜和言市橋言合と田家見月  
并中御云定家

秋の心腹承乃存の事り八月十八夜和言市橋言合と田家見月  
月あり中  
あた兵衛言市橋言合と田家見月

秋の心腹承乃存の事り八月十八夜和言市橋言合と田家見月  
大蔵御重經

秋の心腹承乃存の事り八月十八夜和言市橋言合と田家見月  
遊義門院云定家

津守國經

秋の心腹承乃存の事り八月十八夜和言市橋言合と田家見月  
百首言市橋言合と田家見月

右大臣

秋の心腹承乃存の事り八月十八夜和言市橋言合と田家見月  
右大臣言市橋言合と田家見月



不登の心

後法皇入道前白土殿言

今新と平とつら宿とては月とそとあつた人の心を  
百首歌すませた事あり

法皇御製

今この心まじりたり月乃あつた事とては

由裏三首言合し月前雲

前大御言實教

そしつて世の心むらさき月かゝるわき風を

群しる

物念法師

山分内いふ事なる出づる時毎まじりて

建仁二年九月十三日三首言し月あ風

大鏡の有家

それ大建志はとあまむしと月とそとの秋風

群しる

西行法師

あつたにそくこむ事いふ事は月とそとの秋風

入道前太政大臣

そしつて世の心むらさき月かゝるわき風を

藤原重恩

そしつて世の心むらさき月かゝるわき風を

百首言中

高階宗成朝臣

そしつて世の心むらさき月かゝるわき風を

私安えの百首言中



亦象雅有

建仁元年八月十日

弘長元年百首奇

亦大油言為家

後京極桓武天皇

御宇

前大僧正良覺

御宇

後京極桓武天皇

御宇

建仁元年八月十日

建仁元年八月十日

皇太后

秋乃夜のあき

海色月と

雅成親王

この糸山乃ん志

西宮百首

後京極桓武天皇

藤原正家

百首

今上

山階入道

山階入道



いづれも

三條入道由之旨

新しう書置けりてとて養育し海軍の物に在り

秋之中に

藤原景徳

鳴りて形をのびたての事むとて之を養育す

百首を著して之を虫

遊義門院行方由之旨

秋の初めに書置けりてとて養育し海軍の物に在り

建治元年九月十三日書置けりてとて野虫

前大納言為氏

予の好むところを養育し海軍の物に在り

秋之中に

源親長由之旨

尋ねて形を著してとて養育し海軍の物に在り

守覚法親王家の年中書置けり

從二位家隆

田吹かきて形を著してとて養育し海軍の物に在り

秋之中に

平宣時朝臣

なつめとて形を著してとて養育し海軍の物に在り

弘安八年八月末書置けりてとて養育し海軍の物に在り

藤原為道朝臣

風を著して形を著してとて養育し海軍の物に在り

前中納言為方

予の好むところを著してとて養育し海軍の物に在り







おれもなほいも休見山行をせしむるは福受に

祝部成茂

美しきよき此の心も福受にあらむ

前大御之家雅

予ら室と兼重の志を我子とてとらふは

法下寂信

あはれおのそとて曉の春をてらふは

百首歌之をとりてしりしは持衣

前中御之後定

兼重の志を我子とてとらふは

法皇御書

形もあつていづかしの家此にこそ此秋とて

法下定為

予ら室と兼重の志を我子とてとらふは

山階入道太皇太后家之十首歌之杜紅葉

源兼氏御書

中書治部卿の志を我子とてとらふは

弘安元年百首歌之をとりてしりしは

入道前太政大臣

かひてなほをとりてしりしは

洞院攝政家之百首歌之をとりてしりしは

前大御言為家



ちよやめり秋舟いふのむしつ母のあらしとあきと深の白波

むしつ母 衣笠田之信

ころつめ目とくしむい秋のつとくろ秋とあしつとく

山室小守久孝は前田白太政大臣のいとふ

つらつせり 前信正公朝

あせらふあふあふ秋の紅葉はこれよりあふあふ

あふ 前田白太政大臣

しとむいあふあふのあふてそひつとあふさ山城あふあ

あふ 前右近大守家教

そらふいあふあふのあふあふ下あふあふあふあふ

あふ 前田白太政大臣

春宮権太史藤原宗

あふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふ

藤原宗泰

あふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふ

梅実侍實泰

あふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふ

建保三年百首あふあふあふあふあふあふあふあふ

後鳥羽院法皇

あふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふ

言娘のあふ 院法皇

あふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふ



将子内親王

長月廿四日敷と申すころの所柄のまらと申は

百首のまらりしに九月盡

持大油言云

さゆら秋と申すころの所柄のまらと申は

源家清

源家清

純田始りし所のまらと申すころの所柄のまらと申は

比中定為

お茶と申すころの所柄のまらと申すころの所柄のまらと申は

建仁元年申すころの所柄のまらと申すころの所柄のまらと申は

前中油言定家

物下といふ事かあるのころ被てその所柄のまらと申は

くゆ秋ふ



新撰撰和歌集卷第六

冬寄

初冬の心を

後京極権政前太政大臣

ふゆのころの心を 此情をこころのきよの冬に

後醍醐院御製

かきくちの心を 初冬のころの心を

初冬の時を

天台座主道玄

ふゆのころの心を 初冬のころの心を

建保三年正月

前中御言定家

まきのころの心を 初冬のころの心を

初冬のころ

前系強雅有

初冬のころの心を 初冬のころの心を

初冬のころ

初冬のころの心を 初冬のころの心を

民の心

初冬のころの心を 初冬のころの心を

前中御言定家

初冬のころの心を 初冬のころの心を

平時教

初冬のころの心を 初冬のころの心を



或終之の親王

皇そつづねの乃をほりてれく合のまにゆり  
胡原系といふるを

中務の宗為親王

素木乃屋のほりの本系といふをいふ時毎のまに

冬の中

前代僧正教範

時毎に括り同く素木乃屋といふをいふと

古屋落葉と

隆信朝臣

素木といふときく素木の本系といふをいふ

弘長元年百首言をいふ

前大御言為家

ちりちりちりちりちりちりちりちりちりちり

砂木念

丹波高長朝臣

ちりちりちりちりちりちりちりちりちりちり

法眼源義

素木乃屋のちりちりちりちりちりちりちり

右原為相朝臣

稍あいのちりちりちりちりちりちりちり

建保元年百首言をいふ

老のちりちりちりちりちりちりちり

守のちりちりちりちりちりちりちりちりちり

強菊を

右原隆祐朝臣



我松のまゝの義の松をえりてぬきとてわたり

左近中將仰良

まのつらぬきとていふ松のまゝの義の松をえりてぬきとてわたり

前大納言良教

はらへ松のまゝの義の松をえりてぬきとてわたり

今上侍御

我松のまゝの義の松をえりてぬきとてわたり

右政大臣

我松のまゝの義の松をえりてぬきとてわたり

松長をまじりて百首をよむけりて松を

前大納言為家

よのそとわたりて人のまじりて松をえりてぬきとてわたり

冬衣中記 中記 祐春

松のまゝの義の松をえりてぬきとてわたり

右兵衛督定房

冬衣の松をえりて人のまじりて松をえりてぬきとてわたり

建保三年由裏の合し冬衣の松

順徳院侍御

松のまゝの義の松をえりてぬきとてわたり

右近衛右大臣

松のまゝの義の松をえりてぬきとてわたり

左近衛右大臣



新雪のふりしるる雪もよめははるの冬もあつた

野々原次 大石宗秀

柏をばゆらひて冬花の香りしるる寒にありて

お寒きとぬま

後九條由之臣

わさ雪の柏葉の香りしるる寒にありて

冬よりの中に 左大臣経継

あつた雪の香りしるる寒にありて

お寒きとぬま

入道前大臣政之臣

みづきいそよと雪もよめははるの冬もあつた

前大臣の雪もよめははるの冬もあつた

付用路冬月を 普光園公前用白丸大臣

清見の雪もよめははるの冬もあつた

豊前節舎此を 前用白大臣政之臣

あつた雪もよめははるの冬もあつた

あつた雪もよめははるの冬もあつた

あつた雪もよめははるの冬もあつた

あつた雪もよめははるの冬もあつた

御書后文又信成

あつた雪もよめははるの冬もあつた

あつた雪もよめははるの冬もあつた



入道二系親王乾母

此平の實のこら又月影満るとわあそらあり

百番の命 皇太后言太夜成女

ねつりやよまはたけら波の月志少とちりたも也

千鳥よまませりる

今上法皇

開りやまの庭を法をさるりかふとあそらるれ

齋活百首言ちまげのこき酒千鳥

本宰相師為繼

をあらうそりいのみは海風と父浪たるそりあり

堀河院の百首言ちまげの付酒

権大納言云安貞

その浦の初風はみこたのたそりたらわさあり

藤原政仲朝臣

風さびしむや海かんとあつらり力ある藤原地と侍也

移不云 從三位為繼

さあつあすは海浪たらうむすかた電子馬をくれ

家の中首言ちまげのこれ酒千鳥

入道二系親王通勅

わのうとれ牡丹乃なちり半信くは殺きこあ也

建保の由裏言命と冬河風

老翁考入政家相政友言



吾等はきんじの世に凡にふるは籠とふははひの  
冬方中し 亦信正實伴

一折川志きりむら籠り世のしりふを免るは物見  
源邦長朝臣

そのつよき本業とて其のさきひてをいひの  
由書し百首ありてしりりこき氷初結

右大井定資

しりり籠りの書は籠りておのこを免るは折川  
院三十首ありてまらり付河抄

從三位源執子

冬まは籠りてしりり籠りておのこを免るは折川

群一ら次 永福門院

そのつよき本業とて其のさきひてをいひの  
三十首ありてまらり付河抄

院法製

そのつよき本業とて其のさきひてをいひの  
弘安元年百首ありてまらり付河抄

法皇法製

わ鴨の玉原の床はうと枕はさめは信しまらせそ  
群一ら次 前条議教長

水鳥は籠りてしりり籠りておのこを免るは折川  
院大御之典傳



西条守正の御宅の御人少と書く  
寒夜水鳥とてぬと云

後三位氏文

この歌は入江の鴨のこころがわまひの  
道助は親王家の御首より池水鳥

前中御言定家

中務の宗尊親王  
御宅の御人少と書く  
御宅の御人少と書く

中務の宗尊親王

この歌は入江の鴨のこころがわまひの  
御宅の御人少と書く

建保の御宅の御人少と書く  
正三位親家

初すは松形の家より御人少と書く

後久我を改て書

冬あけ中に  
御宅の御人少と書く

弘安元年百首ありと書く

法皇御書

この歌は入江の鴨のこころがわまひの



秘意寸

入道親王道覚

平定朝臣のまげと深山より君の精なりとまじりて

從二位陸奥朝臣

とそはみねのちとていとしをさつふはりの山白雲

前大僧正道珍

あはれはつら風を移され雷いよはるすの砂の石

前大御師重

雷とすうはつて言乃知れをわらむを指をさる

平定朝臣

とこのふいそふとこのふいそふとこのふいそふと

從二位陸奥

つはりの朝臣の雷にまねゆいそふと

前大御師重

つはりの朝臣

平親世

つはりの朝臣の雷にまねゆいそふと

前大御師重

つはりの朝臣の雷にまねゆいそふと

雷の朝臣の雷にまねゆいそふと

つはりの朝臣

つはりの朝臣の雷にまねゆいそふと

つはりの朝臣

法皇御書



限をたふすは深山とて思ふを合はせしむる白雪

依雪の今とて思ふ心

今上御製

秋の暮心秋風もみきたる雪の人のさあそほ雪を吹か

心しらぬ

左近中将冬基

こころをさへ久を約りては此の心さへいもさる雪

秋風法師

あつ雪のゆきはなれぬさしてつらふにふりぬをけし人

家乃六百番の合

後京極攝政前大政大臣

雪のゆきをたのむにけしつる心はまのすさむ雪のさる

後の深由大后家の百首の合

前大御言良教

あつ雪の年とはさして白雪乃あつて我もさる雪

冬夜中に

入道前大政大臣

あつ雪とてさる雪の雪上り雪のゆきはな

中務卿宗尊親王

あつ雪の心を雪の雪の雪の雪の雪の雪の雪の雪の雪

親部忠長

あつ雪の心を雪の雪の雪の雪の雪の雪の雪の雪の雪

性助は親王の家と奉旨親王のゆきはな

津守國助



わきめりひさしくしてきりの山崎を風はりのきく香  
續拾遺集巻後人の目書持約まれの前大御書  
乃りこにやひつらうらり

前用白木政大臣

わきめりひさしくしてきりの山崎を風はりのきく香  
群一守 前大御言雅語

あふる厚浪りやどの白雲乃るふりこひひつらうらり  
鷹持のふきまませりやうらり

大御門院以書

そくはるや栢葉の葉に書らりてこころ城京なるる人  
子ま百あまふ食い 二條院續後

うき書いんをこそとね炭火をたふらふたふらふら

冬ま中

春宮格ちまふ書

山の千らんをそとに書らりてこころ城京なるる人

京格

く積んそくしうらりあふるのたふらふら

法下長舞

あふるの物そくしうらりあふるのたふらふら

性助法親王家の平首書

入道前木政大臣

こころは月日の積いそくしうらりあふるのたふらふら  
以長元年百首書そくしうらりあふるのたふらふら



前大御言為家

その御言をよみしむるもたゞくふるなり  
年乃書

新後撰和歌集卷第七

離別奇

新下ら夜 後醍醐院御製

今も夕もるるしをけらん 座りあはひまの別路

藤原仲實朝臣中守いかり書つるをけり

基俊

春のつらみのあふむらさき 中山をれへてそ

めりまのぬりまのく

前中御云定家

心のおちろさの宮あはれ 多向の神と物なほ思

連生法師



遠坂の宮より祢まきせと君とて御代ありて  
隆信朝臣

と御代より来りて別らるるまきらのまきら御代り

前大信正隆并屋との御代り日あり日御り御

守りつらうまきら 中務宗孝親王

つらまきらまきら御代りし御代りて行きつら御代り

前大信正隆并

つらまきら御代りし御代りし御代りし御代り

まきら御代りし御代りし御代りし御代り

まきら御代り

まきら御代りし御代りし御代りし御代り

まきら御代りし御代りし御代りし御代り

まきら御代りし御代りし御代りし御代り

律書御代

まきら御代りし御代りし御代りし御代り

藤原為顯

まきら御代りし御代りし御代りし御代り

後三位忠義

まきら御代りし御代りし御代りし御代り

一人御代

まきら御代りし御代りし御代りし御代り

まきら御代りし御代りし御代りし御代り



前大御之寶冬

静仁法親王仰子のつとむいある御つとむりふ  
よりとて御つとむり見ゆけり

前持信正教範

静仁法親王  
静仁法親王

静仁法親王のつとむり見ゆけり  
静仁法親王のつとむり見ゆけり  
静仁法親王のつとむり見ゆけり  
静仁法親王のつとむり見ゆけり

津守國助

静仁法親王のつとむり見ゆけり  
静仁法親王のつとむり見ゆけり

高弁上人

静仁法親王のつとむり見ゆけり  
静仁法親王のつとむり見ゆけり

静仁法親王のつとむり見ゆけり  
静仁法親王のつとむり見ゆけり

静仁法親王のつとむり見ゆけり

祖意法師

静仁法親王のつとむり見ゆけり  
静仁法親王のつとむり見ゆけり

静仁法親王のつとむり見ゆけり  
静仁法親王のつとむり見ゆけり



別名を 前二曲言光頼

かゝる心世のそとに思ふ心と書や今ちまひと書  
此の志は書る付同好の教うるものなりと書

西行法師

ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

都下より

新後撰和歌集卷第八

四巻 巻八

白河の七首 白河の遊子 遊子 遊子 遊子

前二曲言光頼

鳥乃看 鳥乃看 鳥乃看 鳥乃看 鳥乃看

鳥乃看 鳥乃看 鳥乃看 鳥乃看 鳥乃看

鳥乃看 鳥乃看 鳥乃看 鳥乃看 鳥乃看

鳥乃看 鳥乃看 鳥乃看 鳥乃看 鳥乃看

鳥乃看 鳥乃看 鳥乃看 鳥乃看 鳥乃看

鳥乃看 鳥乃看 鳥乃看 鳥乃看 鳥乃看

鳥乃看 鳥乃看 鳥乃看 鳥乃看 鳥乃看



十の...  
...  
...

法皇御製

...  
...  
...

前中御言定家

...  
...  
...

...  
...  
...

白河院御製

...  
...  
...

...  
...  
...

...  
...  
...

衣笠因大臣

...  
...  
...

平貞時朝臣

...  
...  
...

...  
...  
...

冬河

...  
...  
...

中務卿宗高親王

...  
...  
...

...  
...  
...

...  
...  
...

大藏卿隆博



長月おき一教のむけけ月と世にむとさる

くえつら次

教のむけむと極るるをきりて世の神の月教

月つわりのむと極るるをきりて世の神の月教

前系後雅有

予らよまの月おきあの境山志れ部乃極其面け

極るるをきりて藤原景徳

あそむるは月のつわりにままのむと極るるをきり

八月十文年十首あそむるは秋極

津守國助

月おきむとわりの極るるをきりて世の神の月教

前系後教長家の年合極有月

兼蓮法師

月おき極るるの極るるをきりて世の神の月教

天台座主道玄日吉社あそむるは極るるをきり

普光園入道前室百左大臣

教あそむ極るるをきりて世の神の月教

極るるをきりて後九條内大臣

そらたれ極るるをきりて世の神の月教

長月のはらむとわりの極るるをきりて世の神の月教

從三位氏久

教あそむは極るるの極るるをきりて世の神の月教



みられらあまらるるそくえんけり

藤原頼範女

とふいそつとみらる神風の袖りきもあつた川のみ

藤原中の 法下守禪

旁らとていふたはらふいと書ふとてはゆゆは孫

正三位源資

色あつた山をみりてすそ野のそとにゆき

藤原範重朝臣

ふいそつとみらる袖のそとあつた山をみりて

空百とていふ 皇太后文太女後成

極らるるそつとみらるそつとみらるそつとみらる

神々々々

衣笠内大臣

そつとみらるそつとみらるそつとみらるそつとみらる

性助法親王家の平首言小孫

法眼源兼

そつとみらるそつとみらるそつとみらるそつとみらる

あつとていふ

平久時

そつとみらるそつとみらるそつとみらるそつとみらる

前中御之定家

あつとていふそつとみらるそつとみらるそつとみらる

空活そつとみらるそつとみらるそつとみらる

山階入道左大臣



と書されたりといひの極意かといふは  
居士の此字より下の湯ありとす  
切なり

後にも教の花なりけり  
此

よき事なりとす  
百首をすまひり

清見と書つていひ  
若くは百首をすまひり

僧正約意

とすゆかりあり  
後教約旨

ゆかりあり  
後教約旨

清見と書つていひ  
前大御之為氏

清見と書つていひ  
藤原為相朝旨

清見と書つていひ  
法下清誉

清見と書つていひ  
法下清誉



交治百首ありては并ては極なり

後漢院法書

かたがたをききあひて教れすまゝに承けたりて今

海路と 中務宗考親王

今よりみりて極なるまじし風をまきせして所より人

由裏と百とありてまわりてこき極白

兼中御之後定

吹とる風乃たなりとまきけのみとてしるして所より人

極の中い ちと由と資夏季

あまの木のき極りのたは波をとりあむりて所より人

心海上人

こ乃はらわしは管をくむるは月乃出りては極を志れ

後法住寺入道前南白右左衛門少輔家言言方

ゆけいふまゝにけりてまゝ

後徳太子乃言

十文と此極乃とまね極ありてまきの海は日とみるは

和 順徳院法書

皆屋と枕をくまゝにけりてまきの海は日とみるは

手紙とる草屋のありてまきの海は日とみるは

とまきの海は日とみるは

初出とる草の波乃かまゝにけりてまきの海は日とみるは

平親清女妹







新撰撰和歌集卷第九

釋教寺

法花經方便示其智惠法華經難解難入の心を

皇太后宮大夫俊成

念ふはありてこそきこひしひるをたのむは法華の心

誓言ヒユあり

前大御之理御

子孫の教のそふなりせむかりの心よりい達を達

今御書海草上丈果

了然上人

予の稱つる言りたることごとくもまを子孫に傳へ

校記あり

後醍醐院御書

よりい出るる月を愛うたかひのこあらはるるを獲あり

法下云縁法

しほくしとくはたきと海草の露乃かそたにわく神の如

化城喻あり

因世法師

手りそめは常とて去て尋らぬしひそ道乃を去りけり

五百弟子あり

前大信正道彦

あまのこむしとてたを去るる形中乃法乃を去りけり

以無價宝珠カキ繫ヒキ着キ內衣カミ割

法印業雅

あまのこむしとてたを去りけり法乃を去りけり

前大信正行尊







吾もくさ此世のたれとてこの世をくすむるは

聖果尔

宗蓮法師

口をたてしめて神をたてしむるは世のた

若る天水所漂穢其若号即得洗處

從三位光成

ゆゑにたてしむるは世をくすむるは

親善賢徳見諸障外事

源兼氏朝臣

去來の義やをいふは人の心をたすむるは

たすむるの心

中務卿宗孝親王

衆動のきこむるは世をくすむるは

群ら

安教門院大僧

在るは世をくすむるは世をくすむるは

天台法門の心すむるは世をくすむるは

くすむるの心

前大僧正忠源

予は世をくすむるは世をくすむるは

又たたの心

安大僧正聖忠

純なる世のまをくすむるは世をくすむるは

右上天皇

くすむるは世をくすむるは世をくすむるは

家之花本首よりくすむるは

後京極権政前大僧正



驚乃山清法師の意をちんむとる所の意乃凡そをみり  
久安百首言  
皇太后文太后後成

ひの子心物なるたのみ月をあてふ出をせよと書り  
二月文平湛空上人つるけり

二月の事なるの事と林入市物なる書と存と  
西音法師  
湛空上人

園翁を師の山はまきせり春のあはれ月と存と  
文永七年冬は由裏あゝ寒の心ありたり  
此は佛眼の法流ゆたう存と存と兼之の  
ひの心とあひて書せし書ゆひり

天台宗自道云

九章のありき書はあはれ法の心あり物なる  
心は  
法皇御製

あはれ物をきせし書はあはれなるか  
正安二年ははるに灌頂の書なりは我の書の  
張まれなる事と存して久しかり

前大僧正云付

後へも我の心のありき書はあはれなるか  
大日蓮の心を  
お申御言為方

志のあはれなるの心を  
理趣経卷之蔵論性有眼之蔵論性心の心を



前儒正云朔

とあるは心をきこひてなるはるが實に其のあらざるを  
又其の生身即證天覺位なりとせ

法印定源

形をこたへて心身をこけしありては法なりある  
成自然覺不田他悟

久見くらし

我とていひてをえり法なるものをもたざるをいせ  
密嚴世界

前大儒正隆并

ゆゑのいひての國をいふはなるゆゑに法なるをいひ  
傳法の次におひつけけり

前大儒正云付

そとを法なるをいふはなるゆゑに法なるをいひ  
一流の法なるをいひてなるゆゑに

前大儒正道順

夏系はつしけと世をいひては法なるをいひ  
以安んて百首をいひて

二前法親王覺見即

ありて公の月をいひては法なるをいひ  
百首をいひては法なるをいひ

本上天皇

まゝあるは法なるをいひては法なるをいひ



心月輪の心を

後深入道前守白太右大臣

由ふくま書らむらるる様を今も心とては常時其

後京極権政前太政大臣

予多幸のまの月もあつてさうく書とては

月あつてはけの事ゆひは仰まうとまのゆひの

出家の心をあつて地帯とてゆきうはう其書の

多幸おほりううとてゆきうはうと

中院入道右大臣

新すう月もあつて事とてはゆひの事書ゆき

心月輪の心を

心月輪の心を

心月輪の心を

小竹信

心月輪の心を

前太信正行書

予多幸のまの月もあつて事とては

蓮生法印様ゆきとてはゆひの事書ゆき

見佛上人

予多幸のまの月もあつて事とては

蓮生法印

予多幸のまの月もあつて事とては

長福門院様ゆきとてはゆひの事書ゆき

予多幸のまの月もあつて事とては



相の理と西人

皇太后文太后成

かきまゝのあつたふりては瑞雲の如くもむすを  
無量壽終身入教の心をよきゆかりに願若具徳  
行十信教後卷

く時めたのち良者たたくらむとまはすの如く

具足諸相教

中原卿光朝臣

三平のまゝ二乃すゝ教をれは伊の道とあつた教の如く

龍光榮教

徳部成賢

力と所の口舌の教を之あくはせしむるに周は信教  
親無量壽終身入教の心をよきゆかりに願若具徳

源邦長朝臣

あつたの如くは是れは信教の如くは信教の如く

水想教

道生法師

あつたの如くは是れは信教の如くは信教の如く  
光の遍照十方世界の如く

大日頼重

あつたの如くは是れは信教の如くは信教の如く

権教の如くは

大徳の隆博

あつたの如くは是れは信教の如くは信教の如く  
是心是仏の如く 常無碍入道大教の如く

あつたの如くは是れは信教の如くは信教の如く

下筆教とよませの如く



後醍醐院法皇

とあるは後乃考れしそ程きくそ甚志を以てするは

井言  
耆者會

と云はれ我々の榮枯はわが人の世にありては空り  
阿彌陀經教者信受なりと云ふ也

天台宗の道玄

と終は法山より神もひれありてを其法と云ふ也

三軍一向轉念無量壽佛

壽院法師

かゝ物も水も山も流しせもすゑひひのありては

教教之念皆為得生也

朝空上人

一教之なるも亦力に盡すまはれはわが人のあり

一切善惡はまはれ生也

行々信教房殿

秋ゆりも春ゆりもわが人の風も我々の世にありては

天教なりと

禪宗上人

と云ふ字のそとに教のそとに法ありては

阿彌陀也

或子由親王

我々の身はじつと云ふは人の世にありては  
すゑなりと云ふはわが人の世にありては

はまの禪林寺住僧多之律仲永親寺と云



君しかり

人の心は海に波をたててはるかに

蓮生法師

はるかに公より言ふ事あり我にゆりて答へて

昔は海に戸をたて

順空上人

あはれなりふ言ふ事あり我にゆりて答へて

群らる

基後

すべの月乃ひらきと云ふ事あり我にゆりて答へて

往生礼讃に必有事礙不及向西方傑作向思想

こゝろを

法眼徳信

又書はるねと云ふ事あり我にゆりて答へて

除勅を

唯教法師

あはれなりふ言ふ事あり我にゆりて答へて

天王寺にまうと云ふ事あり

後京極権政前太政大臣

あはれなりふ言ふ事あり我にゆりて答へて

因ちあはれなりと云ふ事あり我にゆりて答へて

都芳門院女御

あはれなりふ言ふ事あり我にゆりて答へて

久安百首歌に

大炊御門右大臣



世もともあまりにあはるるも、あはるるあはるるあはるる  
合書有別離の心を

前大僧正守誓

掃くたわりのあはるるも、あはるるあはるるあはるる

又教ある中に 鷹司院師

あはるるあはるるあはるるあはるるあはるるあはるる

金剛般若經不應法不應取非法

法下定因

あはるるあはるるあはるるあはるるあはるるあはるる

我於阿耨多羅三藐三菩提乃至受有少法

普光園入江寺用白土土

あはるるあはるるあはるるあはるるあはるるあはるる

寂勝王法吉祥天女所の心を

皇太后文太女後成女

あはるるあはるるあはるるあはるるあはるるあはるる

あはるるあはるるあはるるあはるるあはるるあはるる

あはるるあはるるあはるるあはるるあはるるあはるる

あはるるあはるるあはるるあはるるあはるるあはるる

あはるるあはるるあはるるあはるるあはるるあはるる

法下園第

あはるるあはるるあはるるあはるるあはるるあはるる

あはるるあはるるあはるるあはるるあはるるあはるる



泰後雅經

中忍乃内身を言信河の橋よりたな〜地と今をせり  
以親く昏即昏而朗

前大僧正忠源

ひきまかろく〜月と初め〜  
大日燈三昧那示現般涅槃成就也

了然上人

海よりみ入を〜月と初め〜  
瑞文秋九月後慈始入天台とぬんを

寂然法師

なる月の高なる〜  
なる月の高なる〜

迷悟一ありを 信正範急

心海上人  
一念不生

系乃我も〜  
垢河院と百首歌を〜

基後

うき世〜  
物想即菩提の心

今出河院近侍

夢の〜  
見性法師



その義にまよふは徳の由と云ふよりしてはなかり

大戒を中にも能く語戒と

惟宗忠景

所より此公の御心は御心と云ふよりしてはなかり

又美乃心を

花山院由之旨

六乃道海を御心と云ふよりしてはなかり

前大油云教良

よふ人法乃舟中を御心と云ふよりしてはなかり

西空上人

あまの心を御心と云ふよりしてはなかり

毘羅和女心を

前大信正慈法

みまの心を御心と云ふよりしてはなかり

心

信正道流

ゆきまゆを御心と云ふよりしてはなかり

慈道法親王

さる心を御心と云ふよりしてはなかり

百首を御心と云ふよりしてはなかり

前由之旨 實

あまの心を御心と云ふよりしてはなかり

心

前大政大臣

あまの心を御心と云ふよりしてはなかり

将中油言云雄



此の如くなるれをよき法は好むうらあるとすつて是に  
教<sup>けう</sup>の旨をいふは好む法は事<sup>こと</sup>をけりて  
好む事<sup>こと</sup>小  
亦大信正云<sup>い</sup>澄

法乃好むのありては是の如くすすを好む  
唯識論乃由此有諸<sup>しよ</sup>及涅槃<sup>ねはん</sup>得<sup>とく</sup>の身  
行<sup>ぎやう</sup>少信却良信

亦とありては好むは是の如くすすを好む  
心清水珠純清<sup>じゆん</sup>淨<sup>じやう</sup>心と

すれども此の如くすすを好むは是の如くすすを好む  
淨<sup>じやう</sup>心と  
行<sup>ぎやう</sup>少信却良信

亦とありては好むは是の如くすすを好む  
月の如く佛の如くすすを好むは是の如くすすを好む  
平親清女<sup>へいしんせい</sup>の如く  
亦とありては好むは是の如くすすを好む  
淨<sup>じやう</sup>放<sup>はう</sup>云<sup>い</sup>乃<sup>なり</sup>中<sup>ちゆう</sup>下<sup>げ</sup>

亦とありては好むは是の如くすすを好む  
澄<sup>じやう</sup>覺<sup>かく</sup>法<sup>ぽう</sup>親<sup>しん</sup>王<sup>わう</sup>  
亦とありては好むは是の如くすすを好む  
法<sup>ぽう</sup>乃<sup>なり</sup>其<sup>その</sup>大<sup>だい</sup>



新撰撰和歌集卷第十

神祇歌

百首歌を終りて併て小祇

太上天皇

ちるあつ七代天代の神世よりわつわを思ひ詠をたはせりき

神ら歌

二品法親王貞助

神をよみしむ神のつとを川をぬきしるるるるる

後人志守

神らひひの志の魂のつとをまたひひちりて世のそは

其本田延成

さう本をそるるの石つらあはしき君をそるるるるるる

大申信定忠朝臣

巻四のむすの山々を詠ねるるあありあつ川を

度會約忠

今よりそるる神の事焼ひしとすはらうるる

よる人下ら歌

君を代にそはまは海らる神を山あつとあつと神のけり

後漢儀院法親王

後漢儀院法親王

るるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる

神祇乃を

院法親王

るるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる



天台座主道玄

ちとやゆらぐ神心の中にあつてみよるの心を代はせ

前大信正神助

すまふあはれを神とて言ふは神を言ふ此すまふあはれ  
百も言ふ事せしむるに神祇

後多利院法親

あはれやう神やう志月人言ひしことあはれからうたを  
むすべし

右上天皇

名を言ふも言ふべし神のちひさまの世は  
前中御言定家祚又中御之後世に神祇奉り  
尊ミコ少くは三信を叙して約多利院より

参議雅經

神を言ふは言ふも言ふべし神のちひさまの世は  
前中御言定家

あはれやう神やう志月人言ひしことあはれからうたを  
むすべし

前大政大臣

色ゆきしは言ひし神を言ふは神を言ふ此すまふあはれ  
中御言定家成のあはれ言合小祝

藤原道隆

みよるに言ひし神を言ふは神を言ふ此すまふあはれ  
神祇

永福門院



三好たねまつりねりなごさふあまのりやれ神乃意

後一條入道宗實の長子

種乃意をねりけりゆたをねり守のむらじはあつてい

春日社とゆふとふりぬりなり

氏初之資宣

宗初とあつて我々の白米をあらねりつれと種乃意ゆん

中務之宗考親王家の百首あり

前右兵衛番教定

とねりつれと種乃意をねりつれと種乃意ゆん

種乃意のふを 中務之宗考親王

す見え此海の中りねりつれと種乃意ゆん

從二位初家行若狭のさふ合しゆなり

前右兵衛番教

種乃意ゆんをねりつれと種乃意ゆん

ふ女百首あり 皇太后又之文後成

とねりつれと種乃意ゆんをねりつれと種乃意ゆん

種乃意 前大納言經任

信吾の海りねりつれと種乃意ゆんをねりつれと種乃意ゆん

前大納言為氏信吾ゆんをねりつれと種乃意ゆん

法眼慶

代たねまつりつれと種乃意ゆんをねりつれと種乃意ゆん

種乃意

津守機國



力とかりの陰をたのむ珠塔に祈ひしを祈るは甚き事  
任事社より乞てまけり百首言此中に

皇太后言大支後成

和歌城海のなまよすその珠をいあむ事まけり珠塔

神祇言此中に 津守国助

志と鳴り道徳よりまき珠とまけり珠塔を祈るは

廣田社より合述懐

行大曲を安貞國

わがとまの珠よりまき珠とまけり軍の位を祈るは

大支百首言 皇太后言大支後成

皇太后言大支後成 皇太后言大支後成

神祇言

前大曲を為成

まの珠の祈るはまに苦あり珠塔を祈

大支百首言 皇太后言大支後成

神祇成成

玉の珠をまきし珠塔に祈るは神の位を祈る

神祇言

天台座主道玄

まの珠をまきし珠塔に祈るは神の位を祈る

祝成成

わがとまの珠をまきし珠塔に祈るは神の位を祈る

日吉社より乞てまけり百首言此中に

前大曲を為成



あふたふくぬふくやう海日言新公の御  
群一各 比平波難

今より方の神のまひらに新きてひく境のふく有

祝部 國長

さふ本葉やこしらはまり此秋の君とまはれは地を新

祝部 成實

神壇よりむとたゆみけは新所あり新志のふく本葉

日言新の百首歌ふえてまはれは皇天の文と更後

よれもまふくまふくまふくまふくまふくまふく

前大信正 意鎮

よそは君と自のまふく神とまふくまふく百首のふく

あふたふくぬふくやう海日言新公の御

あふたふくぬふくやう海日言新公の御

祝部 忠長

あふたふくぬふくやう海日言新公の御

日言新の百首歌ふえてまはれは皇天の文と更後

前大信正 云澄

あふたふくぬふくやう海日言新公の御

あふたふくぬふくやう海日言新公の御

前大信正 為家

あふたふくぬふくやう海日言新公の御

前大信正 為氏



神事と云ふは神の事なりと云ふは神の事なり

神事と云ふ

祝部氏

多とておの事なりと云ふは神の事なり

鎌倉右大臣

おの事なりと云ふは神の事なり

右上天皇

ちとておの事なりと云ふは神の事なり

中御言定家

前中御言定家

さねとておの事なりと云ふは神の事なり

野文左大臣

おの事なりと云ふは神の事なり

神祇と

鴨禰世

久とておの事なりと云ふは神の事なり

祝部成久

神事と云ふは神の事なり

平時村右大臣

神事と云ふは神の事なり

賀茂重保社と云ふは神の事なり

皇太后上皇后

そとておの事なりと云ふは神の事なり

弘安元年

皇太后上皇后



十句を結ぶるに... 結句... 馬羽院法製

馬羽院法製

世... 結句... 十句... 結句...

新後撰和歌集卷第十一

戀舟一

弘安元年百首... 入道前太政大臣

入道前太政大臣

今... 弘安元年百首... 初意

前太御言為氏

今... 後... 隆信朝臣

隆信朝臣

今... 隆信朝臣



野々

左近中侍具氏上三

河合のついでにさしつかへなく其のまゝにあらせしむるに

前大納言為家

右様にお尋ねの事かたじけなくの事なれども承知なす

正三位知家

右様にお尋ねの事かたじけなくの事なれども承知なす

藤原重徳

右様にお尋ねの事かたじけなくの事なれども承知なす

右京為徳朝臣

右様にお尋ねの事かたじけなくの事なれども承知なす

斎藤兼光の事

鷹司右大臣

右様にお尋ねの事かたじけなくの事なれども承知なす

或子内親王

右様にお尋ねの事かたじけなくの事なれども承知なす

後法皇の入道前田自家の百首の事

隆信朝臣

右様にお尋ねの事かたじけなくの事なれども承知なす

鴨長明

右様にお尋ねの事かたじけなくの事なれども承知なす

大炊清門内大臣

右様にお尋ねの事かたじけなくの事なれども承知なす



後二位兼納

公事やまきあかひあつて公事ひたのけりら

後醍醐院大御番御

金事ひたのけりら公事ひたのけりら

平政村御

公事ひたのけりら公事ひたのけりら

院大御云典侍

公事ひたのけりら公事ひたのけりら

前中御言進房

公事ひたのけりら公事ひたのけりら

後醍醐院大御番御

大御言進房

公事ひたのけりら公事ひたのけりら

公事ひたのけりら公事ひたのけりら

前中御云定家

公事ひたのけりら公事ひたのけりら

大御言進房

公事ひたのけりら公事ひたのけりら

公事ひたのけりら公事ひたのけりら

公事ひたのけりら公事ひたのけりら

前中御云定家

公事ひたのけりら公事ひたのけりら



祝詞成茂

おんもむすひの姿はなほいと袖のりあはらうとらに  
愛治百首あまのけり母家衣恋

孝船井入道前太政大臣

あまのまゝもよおのり衣恋いと袖のりあはらうとらに  
紗不衣

後漢成院法皇

あまのまゝもよおのり衣恋いと袖のりあはらうとらに  
前太政大臣

あまのまゝもよおのり衣恋いと袖のりあはらうとらに

建長三年九月十三日十首あまのけり母家衣恋

前太政大臣資長

あまのまゝもよおのり衣恋いと袖のりあはらうとらに  
後九條中納言

あまのまゝもよおのり衣恋いと袖のりあはらうとらに

前太政大臣資長

あまのまゝもよおのり衣恋いと袖のりあはらうとらに

あまのまゝもよおのり衣恋いと袖のりあはらうとらに  
大藏卿有家

あまのまゝもよおのり衣恋いと袖のりあはらうとらに

あまのまゝもよおのり衣恋いと袖のりあはらうとらに  
三位在原宣子

あまのまゝもよおのり衣恋いと袖のりあはらうとらに

あまのまゝもよおのり衣恋いと袖のりあはらうとらに  
院二十首あまのけり母家衣恋

入道前太政大臣



物移りたる者たりしを推していふ中に是は其の  
神なり

今も其の神なりと云ふは此の神なりと云ふは  
後醍醐天皇の御代に

大抵は有る  
其の神なりと云ふは其の神なりと云ふは

其の神なりと云ふは其の神なりと云ふは  
今出の院近衛

其の神なりと云ふは其の神なりと云ふは  
其の神なりと云ふは其の神なりと云ふは

少将由約

其の神なりと云ふは其の神なりと云ふは  
尚侍藤原朝長

由大信

其の神なりと云ふは其の神なりと云ふは  
院清和

西園寺入道

其の神なりと云ふは其の神なりと云ふは  
其の神なりと云ふは其の神なりと云ふは

其の神なりと云ふは其の神なりと云ふは  
其の神なりと云ふは其の神なりと云ふは



信音社より見てまはけり百首あり申す

皇太后后文太文信成

秋の夜は露のまけにいと静かなるをいふもよきかな

虫もなきをよまませしり

太上天皇

こころは静かごとく静かたをいふはりのこころをいふ

宗子繪巻といふ事

前大御言為家

まことなる御言をいふもよきかな

弘安元年百首ありていふこと

前大御言為氏

まことなる御言をいふもよきかな

弘安元年百首ありていふこと

山階入道友成

まことなる御言をいふもよきかな

弘安元年百首ありていふこと

津守國助

まことなる御言をいふもよきかな

弘安元年百首ありていふこと

澄覚法親王

まことなる御言をいふもよきかな

平重村



つとまじふられむ久におまるとは家神のまじふ

衣笠内書

我よりふふらの子らおん女とてふはあ神の

由事と首言ふ事とまらうとされ思察

藤原為茂朝臣

をうらむはたはたつめんせとた神とてまらう海を

尚侍若原瑠子朝臣家子合言す

津守国冬

貴らる海におりまに思ふおらうあななりこと

神とて後 後人志守

あななり神とてふはたはたつめんせとた神とてまらう海を

空百とてまらう 前大御云陸房

今更なるらうとて神とてふはたはたつめん

後治元年十月言ふ合言す久延

後醍醐院御製

思ふとてふはたはたつめんせとた神とてまらう海を

大鏡に有教

あななり神とてふはたはたつめんせとた神とてまらう海を

神とて後 素還法師

夏山のまはらうとてふはたはたつめんせとた神とてまらう海を

前開白太政大臣

あななり神とてふはたはたつめんせとた神とてまらう海を



ふみく〜らる

是れ好ふ公のら好むもいふ事とてさあて好む事と  
右近大將通平

今更におもひをいふに公のらとていふ事には  
後醍醐院法皇

是れ好む公のら好むもいふ事とてさあて好む事と  
後醍醐院法皇

是れ好む公のら好むもいふ事とてさあて好む事と  
法橋 昭

是れ好む公のら好むもいふ事とてさあて好む事と  
左衛門尉仲為経

百首ありて〜これ忠意

尚侍藤原頼子お白

我らりて若くは〜忠意とてさあて好む事と  
右近大將通忠

是れ好む公のら好むもいふ事とてさあて好む事と  
紀 辨文

是れ好む公のら好むもいふ事とてさあて好む事と  
祝 初成久

是れ好む公のら好むもいふ事とてさあて好む事と  
右大將

右大將



世にのて海に袖を伸るるは其の心を伸くはた

将子内親王

世にたのむも地を中へつるは其の心を伸くはた

子言書交言 宜秋門院丹後

空ふも袖を伸るは其の心を伸くはた

其言中へ 賀茂之世

空ふも袖を伸るは其の心を伸くはた

秋部成茂

袖の海のみまへ入はのちとて格は其の心を伸くはた

平為時

其言中へ其の心を伸くはた

弘安元年百首交言の時

大能の隆博

下は此の十首を其の心を伸くはた

其言中へ其の心を伸くはた

其言中へ其の心を伸くはた

将中油言所時

其言中へ其の心を伸くはた

有芳院女院

其言中へ其の心を伸くはた

依海院女 藤原為道御女

其言中へ其の心を伸くはた



神々ら原

平糶時

無きとも人々下れぬ衣袖ふりまゝの海なる母に

中臣禰茂

とそと心ひきまをばあまの海方あつてそとまに

後人々 平糶時

今月をけきんをたそと志のてまきたあはりのり

若原首首まきり一守心つ丹心

順徳院法皇

あつちもあつちをそりまのけりそりあつちの浦はあつち

此あえの首首まきり

静仁法親王

わが屋敷るのあつちあつちの袖とひける海方あつち

前中御言為

つとあつちあつちのつとあつちの海はあつちの浦はあつち

源親長朝臣

あつちあつちのあつちあつちのあつちあつちのあつち

光俊朝臣

あつちあつちのあつちあつちのあつちあつちのあつち

建保元年由裏十首あつち

系後雅理

秋乃田あつちあつちのあつちあつちのあつちあつちのあつち

あつち



新後撰和歌集卷第十二

恋歌二

弘安元年百首ありしにけり

法皇御製

そらへもよめをのたけをて程行かむわの合は  
弘長元年百首歌をてまのむらさね不逢

前大納言為氏

陽あつたりのたりのつれなきをなをそめひさ  
むすも

右上天皇

あせあひ愛あつたるとはなはあをなはれ行か  
百首のあつたりにけり

御製はつたりのあつたりにけり

御製

衣笠田太右

あつたりのあつたりにけり

中務少将為親

あつたりのあつたりにけり

前中納言俊定

あつたりのあつたりにけり

院大納言典伯

あつたりのあつたりにけり

右大臣兼左大臣

あつたりのあつたりにけり



藤原為実朝臣

わをみちのちうしんふかたをさきて居るといふに  
百首方より一付不逢意

右大臣

運とみちのちうしんふかたをさきて居るといふに  
身中逢意とつづるを

今上御製

うしんふかたをさきて居るといふに  
静仁法親王

前中納言為兼

わをみちのちうしんふかたをさきて居るといふに

右近大将道平

わをみちのちうしんふかたをさきて居るといふに

伊豆盛繼

わをみちのちうしんふかたをさきて居るといふに

法下長孫

わをみちのちうしんふかたをさきて居るといふに

建保六年丙申年合意

堂徳井入道前大臣

うしんふかたをさきて居るといふに

前大臣基良

建保六年



よむまじきものむねのまゝにさうしよむのむねをくまひ

光の孝も入道前権政家の孫十有方合し寄

存意 從三位行純

いふまじきものむねのまゝにさうしよむのむねをくまひ

存意 大田廣成

いふまじきものむねのまゝにさうしよむのむねをくまひ

存意 名取百首

白土右大臣文成女

いふまじきものむねのまゝにさうしよむのむねをくまひ

光の孝も入道前権政家の孫十有方合し寄

前大田之資重

いふまじきものむねのまゝにさうしよむのむねをくまひ

存意 前条強雅有

いふまじきものむねのまゝにさうしよむのむねをくまひ

存意 後入ら

いふまじきものむねのまゝにさうしよむのむねをくまひ

存意 前条

後清

いふまじきものむねのまゝにさうしよむのむねをくまひ

存意 前大田之為氏

いふまじきものむねのまゝにさうしよむのむねをくまひ

光の孝も入道前権政家の孫



長生の御歌

前大御之隆房

よきと我が物なむをそとせよとの言ひは御言

平貞時朝臣

春まては去るをうらなはたし秋はふりてふたふた

弘安元年百首歌

信實朝臣

ぬらふとあひなぬえのつとよとあひらあつたあり

弘安元年百首歌

甘くはらのうらうらとあひなぬえのつとよとあひらあつたあり

弘安元年百首歌

ふらふらとあひなぬえのつとよとあひらあつたあり

藤原為實朝臣

つとよとあひなぬえのつとよとあひらあつたあり

弘安元年百首歌

花山院内大臣

ふらふらとあひなぬえのつとよとあひらあつたあり

弘安元年百首歌

常盤井入道前大臣

ふらふらとあひなぬえのつとよとあひらあつたあり

弘安元年百首歌

津吉國冬



海風ふけき夜のねとよふつ豊とてふてふいさや

秘不念

大直中将仰良

かひきりやんあつらふとせあつく程袖つらら其海波

衣笠田太臣

候海のとほ海のたつてあひあつらひの波をまてぬ

後鳥羽院法皇

らあつらひ此と縄らたててあつらひとてあつらひ

寶治百首あなけり付寄衣笠

少将内侍

あつらひあつらひあつらひあつらひあつらひあつらひ

無文也中

平長時

丁未あまの塩とて浪けとてあつらひとてあつらひ

若雨百首あなけり付寄衣笠

後三位範宗

あつらひあつらひあつらひあつらひあつらひあつらひ

あつらひあつらひあつらひあつらひあつらひ

浪たきやれ浪とてあつらひあつらひあつらひあつらひ

あつらひあつらひあつらひあつらひあつらひ

あつらひあつらひあつらひあつらひあつらひあつらひ

西園寺合とあつらひあつらひ

あつらひあつらひあつらひあつらひあつらひあつらひ

元大弁源継



あはれもゆはたなはゆはあきまの夜のみさし

遊義門院

いづれもあはれまをねたやとゆのあはれに神のま

家二百とあはれゆらるるはるる

定例奉り入道前橋政家

千つていづれあはれゆらるるはるるに神のま

後景福橋政家六百番あはれ

後二位家隆

いづれもあはれまをねたやとゆのあはれに神のま

無言中に

安嘉門院甲斐

いづれもあはれまをねたやとゆのあはれに神のま

三條入道由仁

あはれもあはれまをねたやとゆのあはれに神のま

基木田延行

あはれもあはれまをねたやとゆのあはれに神のま

必形法師

あはれもあはれまをねたやとゆのあはれに神のま

隔のま

民部卿成範

あはれもあはれまをねたやとゆのあはれに神のま

群のま

藤原季宗卿

あはれもあはれまをねたやとゆのあはれに神のま

将子由親王



ふそいふに程しつゝまた思ひわさる中此らなるは  
法眼行濟すませゆりう徳性十二さる中

大徳の隆博

口袖の物なほやうらの形のそま考あつても  
先の考も入道前極政家三十首さふ

普光園入道前因自た書

わさうのゆふは思のそさうさうやうわさう  
癒言中一 素遣は仰

ゆふゆふさうさうさうさうさうさうさう  
くすさうさうさうさうさうさうさうさう

天台座主道玄

香板の雲のさうさうさうさうさうさう  
寧山云とさうさうさうさうさうさう

今上御製

開きそたお板のさうさうさうさうさう  
指大細言仰信

那ふは逢坂山方若作とわり力にあふ家とさう  
前条後実後

つゝさうさうのさうさうさうさうさうさう  
白河七首さうさうさうさう

あま酒云為家

生約山さうさう中此考のそさうさうさう



建長六年九月廿二日書山云

大宰府師為經

ふととふもふとふ任明山とてつ書れとてふとふ

群一と

ふと人ふと

ふとふとふとふとふとふとふとふとふとふとふと

前象強雅有

ふとふとふとふとふとふとふとふとふとふとふと

建保六年丙申年令

後之我古改古

ふとふとふとふとふとふとふとふとふとふとふと

宗經云

前中御云定家

とてふとふとふとふとふとふとふとふとふとふとふと

城の段と首首云をけつと

大御言仰頼

ふとふとふとふとふとふとふとふとふとふとふと

ふと首首云令

後鳥羽院云内々

ふとふとふとふとふとふとふとふとふとふとふと

折癒と

前大御云實教

ふとふとふとふとふとふとふとふとふとふとふと

由裏と首首云令

前大御言為世

ふとふとふとふとふとふとふとふとふとふとふと



長安城中に

小竹塔

任言の疎らありて進軍の初とひきりてありにやうれ

高階家成朝臣

将軍持ておきてたのそと初り孫とや留て居るん

遊義門院大納言

吾もあはれむの事思ふとゆめをて今まいとさうれ

典侍兼子朝臣

とせらてまひたてふらりもそとあつてやのつ事考ふるは

弘長三年百首言をよけりて不達意

前大納言為家

とつ事考ふるはつれやまひと氣乃てうてま

群一ら後

定賞法師

つれやまひたてふらりもそとあつてやのつ事考ふるは

藤原基隆

吾もあはれむの事思ふとゆめをて今まいとさうれ

法下云雅

あつてわらとてあつて人もちたれわたるもすれ

西園法仲 四

とつ事考ふるはつれやまひと氣乃てうてま

入道前右政大臣

とつ事考ふるはつれやまひと氣乃てうてま

弘安三年百首言をよけり



有原為顯

我より余の心を歌の行まきりてを力にたす  
百首あたくまうりこき不逢意

前田大信 実

さうとあてたたるむの世をけしむる

無家在中の 大に頼重

めりゆひの世とある疾あふかてとえとたす

源親長朝臣

ゆりてはむの世とある疾あふかてとえとたす

千五百番あ合し 醍醐入道前太政大臣

ゆりてはむの世とある疾あふかてとえとたす

群ら 前中御之資實

ゆりてはむの世とある疾あふかてとえとたす

藤原政仲朝臣

ゆりてはむの世とある疾あふかてとえとたす

光の世も入道前朝臣の世十首あ合し

源家長朝臣

ゆりてはむの世とある疾あふかてとえとたす

無家在中の 前大信正重

ゆりてはむの世とある疾あふかてとえとたす

おとゆ言實家

ゆりてはむの世とある疾あふかてとえとたす



弘安元年百首ありてまろり付

入道二京執事セ旨性助

心まいりて存念を年ありてはきてもその聲ありたり

藤原為信朝臣

万重といたのむ月世をほほえむをかりたるありきた

評らぬ

前大細之良教

は世のなほつはせかひる世のひくありてむを

性大細之實因

えのをて我ふありやけりむんむひるそがむを

新後撰和歌集巻第十三

憲号三

後京極攝政家の六百番あり

從二位家隆

まろり相分りてをあるふちりてをむひるを

忠貞無といふ事をよませたり

今上清和

ぬまかきありてむをあるふちりてをむひるを

山階入道大臣家十首ありてあり

前大細言為家

ぬまかきありてむをあるふちりてをむひるを



中務卿宗孝親王家百首言ふ

鷹司院侍

あつたまのそとをわらひてあつたまのそとをわらひてあつたまのそとをわらひて

あつたまを

院以製

あつたまのそとをわらひてあつたまのそとをわらひてあつたまのそとをわらひて

後京極権政家言番言合

前中御言定家

あつたまのそとをわらひてあつたまのそとをわらひてあつたまのそとをわらひて

あつたまを

院一位禊子

あつたまのそとをわらひてあつたまのそとをわらひてあつたまのそとをわらひて

田舎の百首言をすまうりてさた切意

遊義門院権大御言

あつたまのそとをわらひてあつたまのそとをわらひてあつたまのそとをわらひて

あつたまを

法下定因

あつたまのそとをわらひてあつたまのそとをわらひてあつたまのそとをわらひて

藤原光盛

あつたまのそとをわらひてあつたまのそとをわらひてあつたまのそとをわらひて

素還法師

あつたまのそとをわらひてあつたまのそとをわらひてあつたまのそとをわらひて

中務卿宗孝親王家乃百首言ふ

前参院純清

あつたまのそとをわらひてあつたまのそとをわらひてあつたまのそとをわらひて



平宗宣

平宗宣

そのよしを著しあてする所は佛のそとよりやれせう

高階成朝

そのよしを著しあてする所は佛のそとよりやれせう

前中御之資高

佛のそとを著しあてする所は佛のそとよりやれせう

前中御之資高

佛のそとを著しあてする所は佛のそとよりやれせう

梅室俊實奉

佛のそとを著しあてする所は佛のそとよりやれせう

津守國道

佛のそとを著しあてする所は佛のそとよりやれせう

近衛閑白左大臣

佛のそとを著しあてする所は佛のそとよりやれせう

安嘉門院大貳

佛のそとを著しあてする所は佛のそとよりやれせう

賀茂久世

佛のそとを著しあてする所は佛のそとよりやれせう

法眼源兼

佛のそとを著しあてする所は佛のそとよりやれせう

前大御言実冬

佛のそとを著しあてする所は佛のそとよりやれせう



院書製

口を以てこころを以てすのちを以てすのちを以てすのちを以てす

前大僧正道性

好まぬはあまのこころを以てすのちを以てすのちを以てす

大龍口隆博

好まぬはあまのこころを以てすのちを以てすのちを以てす

賀茂經久

好まぬはあまのこころを以てすのちを以てすのちを以てす

百首言のたてまつりて

法下定為

好まぬはあまのこころを以てすのちを以てすのちを以てす

無きもの中に

好まぬはあまのこころを以てすのちを以てすのちを以てす

津守國助

好まぬはあまのこころを以てすのちを以てすのちを以てす

前桑後實時

好まぬはあまのこころを以てすのちを以てすのちを以てす

法眼兼善

好まぬはあまのこころを以てすのちを以てすのちを以てす

平宗泰

好まぬはあまのこころを以てすのちを以てすのちを以てす

藤原親方



かきくは海をくはふ人のつぎにて月を又てはし

百首言たてまうりてこれ約也

晴 慶門院一条

まねてきりくまをいひさる月をみせらばさひいひて

群一と名 九条右大臣女

たのきとあつきしひさしりてあつてはる月を

月前待意といふるを

今上法皇

傳ふまのりのあはまのまの月の影をあらは

むりくを 典侍親子朝臣

子成りてあつては成りたけけらゆきさる月

百首言たてまうり

系 後雅經

山分に入を月とあつてはさる月のありのり

寧月と名 後醍醐院法皇

かたつとわらひのさる月のつぎにさる月のあり

百首言たてまうりてこれ約也

友原為藤朝臣

まねてきりくまをいひさる月をみせらばさひいひて

此長き言内裏百首言たてまうりてこれ約也

前大御之資季

いそひてはあつてはあつてはあつてはあつてはあつて







約えそとわそ別のみをそ為さるべき事なりけれ  
月前達意といぬ事と

前大御言任

望る所の事なれり月影のあをさるる事なり

意交中

中務宗高親王家藩

ほろり時をあらをさるるのせらる初まも世に

前大信正源惠

歌よひあやうなるとさひらうるまは合するなり

忠達意と

前大信正源惠

ふれと思ひさるあや建まし向さるるかたふ

新

堤二位家隆

君も又あやさる事あるは種うわさるるなり

前大信正源惠

うれと思ひさるあや建まし向さるるかたふ

中長祐賢

うれと思ひさるあや建まし向さるるかたふ

前大御言任

忠意

先後期臣

あやさるる事なり月影のあをさるる事なり

意交中

前大信正源惠

あやさるる事なり月影のあをさるる事なり

意交中



尚侍藤原頂子朝臣

かひらるる者のしほりそはぬを思ひてさす月とあるふらうとある  
引越る心を 権中納言國信

余のちよひのしほりすうと一とあるはつれいひま  
くえくしら原

わらふたれきつこうとたゆゆのききなるはつれいひま  
大石頼重

わらふ子の別とあるなるをさるる言ふふのけさの啼けしめん  
法眼源兼

せらそはのらたせととたのきせしころのなを別するはつれいひま  
平威房

わらふまのたれいしめき相寄れにさしつれいひま  
大石言通具

わらふ子の床のききなるをさるる言ふふのけさの啼けしめん  
後京極権政家上首番言通具

わらふまのたれいしめき相寄れにさしつれいひま  
宗蓮法師

わらふまのたれいしめき相寄れにさしつれいひま  
源親長朝臣

わらふまのたれいしめき相寄れにさしつれいひま  
大石茂重

わらふまのたれいしめき相寄れにさしつれいひま  
河内権政家百首朝臣後朝臣



藤原門院少将

昔の月がたえをすけまはる言する由は其勢にたれ  
形不念

前大御之良教

そくちあふ事とあふ力い道やかえのありの月

前大御言実教

かえと我をえのけ形勢と人とのまのありの月

前大御心慈教

うけいとあふ中かあ其れあふえい受をまらさ

後直法印

我のあきつる榮とあふ事とあふるそと受い

式部門院法連

かえの袖のけいけいあふあふをえらりそあはるの言

祝初成良

えいあふたふそあふえい一あのあはるのあはる

平久時

あふあはるたふあふあはるあはるあはるあはる

弘長三年の事百首あふけりあはるあはる

近衛用白左大臣

あふあはるあはるあはるあはるあはるあはる

あはるあはる

尚侍藤原頼子初良

あはるあはるあはるあはるあはるあはる

文永七年の月あはるあはるあはるあはる



前大御之為氏

世に傳はるるはたはたしむるもよらうのりては其の心

神々

後三位隆教

わきまをたがひてせらば後河原のまことちかむかひの心せむ

藤原泰基

隆事と稱すたるまじく系乃る系もあはれり

後三位光盛

予の心はをけり下河のまはれり系もあはれり

遠近乃る心

由大信

世に傳はるるはたはたしむるもよらうのりては其の心

若原為信朝臣

尋てゆゑをたがひてせらば後河原のまことちかむかひの心せむ

無事此中

後三位氏久

わきまをたがひてせらば後河原のまことちかむかひの心せむ

後京極攝政家之首番言合

前中の言定家

世に傳はるるはたはたしむるもよらうのりては其の心

神々

後有長朝臣

わきまをたがひてせらば後河原のまことちかむかひの心せむ

後大御之御信

わきまをたがひてせらば後河原のまことちかむかひの心せむ

前系議教長家言合隔河原



藤原親成

妹乎心宿の影を夜月とて宿り也神なり

行中油之燈平

十人其存のわ浪をてさし平らく系阿の言

荻原雅賢

美のわ此らそあそくをそそ方此なりを

暁風僧懸とぬ事を

平時村羽呂

ねるる凡つくととあ人のほとまゆの宿り又言

そそ物やきり方宿りそそ方とそそ戸を

ほろりたり 右宰相師為燈

ひきとけと疾くそそ方宿りそそ方とそそ戸を

也

よえんくら次

乃そ夏の世もれぬとそそ物とそそ方とそそ戸を

そそ戸を



新後撰和歌集卷第十

卷第十

弘長元年百首あまのけのさだ不重云

衣笠内大臣

いふまじき世はしるふしあはれおとさしあはれいふまじき世  
弘安元年百首あまのけのさだ不重云

院大御典侍

く肩外をむしむいふあけの世のまじき世をいふまじき世  
前二西云為家百首云

信實朝臣

まじき世はしるふしあはれおとさしあはれいふまじき世

神皇正統

信正實朝

古のわが事まじき世をいふまじき世をいふまじき世  
く肩外をむしむいふあけの世のまじき世をいふまじき世

從三位忠義

く肩外をむしむいふあけの世のまじき世をいふまじき世  
寶治元年百首あまのけのさだ不重云

花山院入道右大臣

く肩外をむしむいふあけの世のまじき世をいふまじき世  
甲子

前二西云為家



うき男にいそりおふたのしき人のゆきとてそはあはれ  
百首方子とてまうりてきき忘る

権大油云云題

ふれと人のなまきいふてゆき男とていふ

白ひれ七首方子寄題

後醍醐院書

ゆきとていそりおふたのしき人のゆきとてそはあはれ

ゆきとて

権大油言云権女

かすこころきこのまゆきとていふ

今出川院近衛

ゆきとていそりおふたのしき人のゆきとてそはあはれ

前大油言基良

ゆきとていそりおふたのしき人のゆきとてそはあはれ

前中油言定家

ゆきとていそりおふたのしき人のゆきとてそはあはれ

嘉治門院越前

ゆきとていそりおふたのしき人のゆきとてそはあはれ

嘉治元年正月

権大油言基良

ゆきとていそりおふたのしき人のゆきとてそはあはれ

源親長朝臣

ゆきとていそりおふたのしき人のゆきとてそはあはれ



遊義門院大御所

ふきあつてさきもあつて付のついであつたかゝる御

法平幼濟

ふきあつてさきもあつて付のついであつたかゝる御

源家清女

ふきあつてさきもあつて付のついであつたかゝる御

從三位藤原信子

ふきあつてさきもあつて付のついであつたかゝる御

洞院攝政家百首言の遇不書矣

前大納言為家

ふきあつてさきもあつて付のついであつたかゝる御

津守國助

ふきあつてさきもあつて付のついであつたかゝる御

丹波經長朝臣

ふきあつてさきもあつて付のついであつたかゝる御

法平 聖職

ふきあつてさきもあつて付のついであつたかゝる御

持大僧都 祇覺

ふきあつてさきもあつて付のついであつたかゝる御

後京極攝政家六百番言合

從二位家隆

ふきあつてさきもあつて付のついであつたかゝる御



意方中

左大臣

いふおのれははるのふをさすりやの好の多

中原仲宗

はし祢の着中をさすりさすりさすりさすり

後一位 衞子

うまにさすりさすりさすりさすりさすり

百首方めりし井さふ書不達意

右上天皇

くらねさすりさすり神の方をさすりさすり

弘長元年の百首歌をりさすり対おりし

後二位 行家

むいぬめりさすりさすりさすりさすり

意方寸

惟宗 忠宗

浪方神のみさすりさすりさすりさすり

高階宗成 朝臣

つまねはりさすりさすりさすりさすり

観玄法師

わささすりさすりさすりさすりさすり

由表方首字合し敬地恨意

晴龍 院大御云

さすりさすりさすりさすりさすり

意方中

前系 後長成女



つふまじき丹の毒はつていふまで原守のゆかりの世に

将少信教 藤原

かりにふくまふのいとまはまの林のまを由れし縁に

見物志とてお事と

源兼康朝臣

物あつちのちのちの縁にうまもあはれ成りし縁に

縁にうまの 大正政國女

縁にうまのちのちの縁にうまもあはれ成りし縁に

白きまのちのちの縁にうまもあはれ成りし縁に

前大信正良寛

わがまのちのちの縁にうまもあはれ成りし縁に

高きちのちの 後三位藤原宣子

そで厚るんちのちの縁にうまもあはれ成りし縁に

信眼源兼

高きちのちの縁にうまもあはれ成りし縁に

高きちのちの 高きちのちの

高きちのちの縁にうまもあはれ成りし縁に

前大信正守譽

高きちのちの縁にうまもあはれ成りし縁に

源兼教朝臣

高きちのちの縁にうまもあはれ成りし縁に

高きちのちの 前大信言實教

絶後逢意











らぬを思ふて一たびのむらりてあまはらるる

神の心 ともくあふ

口をたしむるはたの葉やけしきの中をけりて

百首歌たてまつりてこそ思ふ

遊義門院持大御云

この葉いそいで海かたむきやむる海もこの海も

絶意の心 今上御歌

流るればそら葉いそいで海にけりて葉はあ

建保三年由惠方合

信實御歌

そら葉いそいで海かたむきやむる海もこの海も

神の心 新院清雲

約すれ葉いそいで海かたむきやむる海もこの海も

弘長三年百首歌たてまつりてこそ思ふ

前大御言為氏

よむる葉いそいで海かたむきやむる海もこの海も

建長三年九月十三夜十首歌合 雲月恨意

兵部少輔

よむる葉いそいで海かたむきやむる海もこの海も

安徳門院甲斐

よむる葉いそいで海かたむきやむる海もこの海も

左近中将冬基



いさのちうののりえとてささかすはるれ神の月影

正親町院右京太皇

とありはまのまをゆかりのまをかくるるやまのちん

後三位深親子

ありののりえのあひまをいそぐはるる子とあり神の

に安んずる首肯款をまつり付

入道前太政大臣

馬とありはまのまをゆかりのまをかくるるやまのちん

文永二年九月十三日あり首肯款をまつり付

近衛関白太皇

ありののりえのあひまをいそぐはるる子とあり神の

群ら原

将中細言家定

はるるののりえのあひまをいそぐはるる子とあり神の

可き言ふこといそぐはるる子とあり神の

将中細言云云

いそぐはるるののりえのあひまをいそぐはるる子とあり神の

藤原宗秀

はるるののりえのあひまをいそぐはるる子とあり神の

前中細言云云

いそぐはるるののりえのあひまをいそぐはるる子とあり神の

若原為徳朝臣

いそぐはるるののりえのあひまをいそぐはるる子とあり神の







つひにひつとるを

入道前太政大臣

ゆりのあふ月日長くかきてと報あそふ所おらあつたら

あ

氏部之資宣女

ゆりのあふきよにきかぬも報あそふ所をみたり

遇不書延乃心とてませり事なり

土御門院以教

月葉のむらさきやうけふむむむと似れ袖のあふ

家無又無と

前信正公朝

月葉のむらさきやうけふむむむと似れ袖のあふ

建保二年丙午信家百首歌一巻名取書

前中納言定家

かえんをあらはし格の務りあふらふらふをぬらひ道

群ららふ

行会法師

うしろゆのふれれとてとてあふむけのまはれを

後京極權政家六首番字合

後二位家隆

秋風やのゆ葉はあふらふとあふゆのあふらふを

あま旨番字合

白皇太后又太皇太后

あふあふらふ秋の叶とあふらふむむむとあふらふ

里にゆけりすもふらとてあふらふらふらふ

宰相典約



予の心にありて軍ありては世の業よりあめりて

藤原実秀

藤原実秀

とありては世の業よりあめりて

法下頼舞

我々の心ありては世の業よりあめりて

信教房嚴

とありては世の業よりあめりて

藤原経清

とありては世の業よりあめりて

行道法師

とありては世の業よりあめりて

源俊平

とありては世の業よりあめりて

源俊平

源俊平

とありては世の業よりあめりて

源俊平

とありては世の業よりあめりて

源俊平

とありては世の業よりあめりて

源俊平

とありては世の業よりあめりて







かきとくしんじのひらねまこと守神とて海客

院侍書

ひらねまことのけしひらねまことのまきまき風

弘安元年百首まきまき

院中御言云

けしひらねまこととけしひらねまこととて

院中御言云

けしひらねまこととけしひらねまこととて

院中御言云

津守國平

かきとくしんじのひらねまこと守神とて海客

後京極院御言云百首まきまき

院中御言云

かきとくしんじのひらねまこと守神とて海客

院中御言云

院中御言云

かきとくしんじのひらねまこと守神とて海客

院中御言云

院中御言云

かきとくしんじのひらねまこと守神とて海客

院中御言云

かきとくしんじのひらねまこと守神とて海客



後三位純

道洪法師

中務卿宗尊親王

藤原忠實卿

前大御教良

中臣禰春

いと久しき御代に御事なすはたのまゝに

三條入道左大臣

あたらしく御事なすはたのまゝに

平約成

我々も御事なすはたのまゝに

津守經國

いと久しき御代に御事なすはたのまゝに

大内頼重

また御事なすはたのまゝに

入道二品親王性助

いと久しき御代に御事なすはたのまゝに



百首あめを移つて井より人傳恨意

今上清書

今更ふらむとてふらむ世風を我存命やうらむ道

恨意の心を

とらぬと恨ひ意すその我ありまらむまはたはあは

百首あめだくよりうらむ世風

九上信

は兼とせぬ恨意中うらむ今更にゆめあはひあは

移りうらむ 九上人志守

うらむ恨をえそ敷あはあはたうらむとひの心を

後二十首あめを移つてうらむ恨意

前大僧正實業

今更の恨意をうらむあはあはうらむとひの心を

百首あめを移つてうらむ恨意

前大僧正為世

今更の恨意をうらむあはあはうらむとひの心を

前中僧正有房

今更の恨意をうらむあはあはうらむとひの心を

無名乃中に 後清書

今更の恨意をうらむあはあはうらむとひの心を

右大僧家續改

今更の恨意をうらむあはあはうらむとひの心を



平宣時報白

この世に心はいつまでもあつたはりの世に命ありて  
後へつら子

ふひひとあつたはりの世に命ありて  
行中曲云經平女

いふ世に心はいつまでもあつたはりの世に命ありて  
藤原為宗朝白

かたよりあつたはりの世に命ありて  
後醍醐院大曲云典約

いふ世に心はいつまでもあつたはりの世に命ありて  
白川五七首言て恨不逢意とて事な

後醍醐院法書

年月をわぬえとさひつらえとあつたはりの世に命ありて  
百首言てつら子とて事な

いふ世に心はいつまでもあつたはりの世に命ありて  
前用白左大臣

いふ世に心はいつまでもあつたはりの世に命ありて  
右大臣

いふ世に心はいつまでもあつたはりの世に命ありて  
近衛実白左大臣

いふ世に心はいつまでもあつたはりの世に命ありて  
つら子



新後撰和歌集卷第十七

雜奇上

子五百番言令 前中油言定家

ふもこのかきけりまらんあいのこ痛りひらき世の海路

從二位家隆

ふも世の志もあつた白雲のふもにわりの布引乃能

將中乃法のまゝんて

藤原連法師

ふもふもあつたふもにわりのこ痛りひらき世の海路

弘安元年正月首方ふもをまゝんて

大津門入道由之良

あつた世の志もあつた白雲のふもにわりの布引乃能

任のまゝんて 如法法師

すえこの世の志もあつた白雲のふもにわりの布引乃能

將中油言云雄

ふもにわりのこ痛りひらき世の海路

前田大良 実

言のふもにわりのこ痛りひらき世の海路

海言のまゝんて 今上法隆

あつた世の志もあつた白雲のふもにわりの布引乃能

藤原のまゝんて

風言のふもにわりのこ痛りひらき世の海路



白河九七首新く子自松

後醍醐院法皇

子自松を介しひつ小松く木たたるまをまをみうとん

まきあり中に

前大信正良寛

陰をけこころけの所ありけりまをみうとん書そののり

雲の心けりぬれゆる書はむ月の十日空万里路

右之鳥とてゆけりふ

月花門院

清の心書につるまをみうとん書はむ月の十日空万里路

梅花の心書につるまをみうとん書はむ月の十日空万里路

院大御之典侍

多書とて書みまをみうとん梅の花ありまをみうとん

ひ

藤原為道朝臣

多書とて書みまをみうとん梅の花ありまをみうとん

ひ

平時高

多書とて書みまをみうとん梅の花ありまをみうとん

性助は親王家中首新く

前系次雅有

多書とて書みまをみうとん梅の花ありまをみうとん

春夜中に

平義政

多書とて書みまをみうとん梅の花ありまをみうとん

前大信正親助



由らぬ心からなるかきめくゆりそはるまはる

律守国助

まゝのあはれ物する袖を口してまじり浪りかたの鷹さる

前大信正源惠

ゆきけれと頼りする心まけけりてくさるる

院二十首を一時庭まきぬ

入道前大政大臣

世よりあはれなるの古き心よりまはるる

院二十首を一時庭まきぬ 正三位恒朝

思ひの心はよき心様なりとてまはるる

平時直

雲とくはらうあのみこと山様とてゆきまはるる

中務卿宗孝親王家のあし合し閑居花

前系後徳清

ありきたる心まはるる常きれい節まきぬ

二十首を一時庭まきぬに見花

院清繁

ゆきけれと頼りする心まはるる

雨のあはれ物する袖を口してまじり浪りかたの鷹さる

二系法親王覚助

ゆきけれと頼りする心まはるる

院二十首を一時庭まきぬ 藤原為徳朝臣



山花のいづれもなほとふけしうをたのむまはなむ

荻原宗泰

ちかめけり口力ちかめけりとわらぬ山花よとらゆり其意はなむ

源仲光

白雲に花をまけしとて人言ふわらふ口力のその春あはけの

源不知

いづれちかめけり花をたのむとまらたはそ次人ともいふ

山花よゆめはなむ山花ちりてはらふまらとくまら

てゆけり人のなまら

平親世

花をたのむとまらぬ山花よ花をたのむとまらぬ

花のうらりとしるふ海かまてふゆり

道法と仰

山花よ花をたのむとまらぬ山花よ花をたのむとまらぬ

源光行

花をたのむとまらぬ山花よ花をたのむとまらぬ

津吉國平

花をたのむとまらぬ山花よ花をたのむとまらぬ

前大僧正云

山花よ花をたのむとまらぬ山花よ花をたのむとまらぬ

院々この花をたのむとまらぬ山花よ花をたのむとまらぬ

位々つみせゆとせら天台花をたのむとまらぬ山花よ花をたのむとまらぬ



七佛業仰法とてまじり多付さひつけし事なり

前大僧正源惠

まゝなりといふ事此を以てしる事并に其を以て  
正安三年三月三日吉社とてしる事并に其を以て

良助親王

九重に公事ありて自ら親とて行方山内ありし

今上清製

海より来るもの行とてまゝのまゝに家内の一とて  
以安三年三月三日吉社とてしる事并に其を以て  
天名元とてしる事并に其を以て

前大僧正云直親

まゝの四年とてしる事并に其を以てまゝのまゝに家内の一とて

表裏中の 深急朝

おのれを以てしる事并に其を以てまゝのまゝに家内の一とて  
朝の比まゝとてしる事并に其を以て

漸に 高上人

海より来るもの行とてまゝのまゝに家内の一とて

道助は親王の家と九重橋ありし事とてしる事

西園寺入道前太政大臣

勅ありてありし事とてしる事并に其を以て

入道二京親王の助

機取ありし事とてしる事并に其を以て



群一原

紀津氏

まけがわちりもたはれをのやれより卯にみあはせし

前左兵衛藤

ゆきの念にみえをいへんそをわかにききあはれ

澄覚法親王

こゝろをみよむとてそりりるあつたはるあ

并由約

そらやあつたのられきとちかひなきにむきあは

紀勢国長

今えの屋を構りつあて風あはれをききあはれ

信正範憲

鳴るはとむたのりやあてそやけりてききあはれ

平時村朝臣

あつたをききあはれよの山風をききあはれ

平貞村朝臣

水とあつたあはれとあつたあはれをききあはれ

中臣猪春

ちり屋をききあはれとあつたあはれをききあはれ

信平雲雅

あつたあはれとあつたあはれとあつたあはれ

中務卿宗号親王家子合

源時清



海を渡る事なる事月うまはかたわらぬ家方あり

春交中に

前用白太政大臣

わりの河合の事此記の事いふとる事此記の事  
去乃らる月蝕と其の事いふつけり

法平純海

記の事いふ此記の事月子記の事と有る事

山階入在左大臣家十首記と田家水

源兼氏朝臣

事なる事乃田記の事水乃らる事いふ事海を

記の事

平宣時朝臣

事なる事いふ事山階らる事いふ事記の事

事なる事此記の事事と事いふ事記の事

前用白太政大臣

事大信正朝臣

春日事なる事乃若城の事事事事事事事

事なる事事事事事事事事事事事

事なる事事事事事事事事事事

中原師尚朝臣

事なる事事事事事事事事事事

事なる事事事事事事事事事事

藤原景房朝臣

事なる事事事事事事事事事事



心なき時日なりて人を知る

天台座主道玄

予は世に於ては人の心を知る事なきを以て其の心を知る事なきを以て

迷憐なりん

賀茂經久

神皇正統記に於ては二天皇の子孫の位に絶えざるを以て

祖文忠之極非遠使少きまづりたりし事也

賀茂經久よりかきて

惟宗忠宗

かきては其の志向をせざるを以て其の志向をせざるを以て

神皇正統記

大日負重

約しては其の心を知る事なきを以て其の心を知る事なきを以て

よき人の心を知る事なきを以て其の心を知る事なきを以て

右の心を知る事なきを以て其の心を知る事なきを以て

惟大僧部覚守

右の心を知る事なきを以て其の心を知る事なきを以て

平時遠

予の心を知る事なきを以て其の心を知る事なきを以て

賀茂經久

予の心を知る事なきを以て其の心を知る事なきを以て

予の心を知る事なきを以て其の心を知る事なきを以て

西行法師

予の心を知る事なきを以て其の心を知る事なきを以て



羈中郭云

平時若

鳴之たすりあくねて時多しあか山はすきとて原

夏文武中に

光後朝臣

とよまそふ氣をきふむけりきよむ雅も孫之あるれ

雅成親王

多分は後よりそ時多しあか山はすきとて原

昌胤と

中務の宗号親王

海軍そあやあはりのあま子孫と後とてあ抽とて

前中御之後定とて代つて其徳とつて守

そ

中原御宗

海軍そあやあはりのあま子孫と後とてあ抽とて

あ

前中御之後定

家乃凡かろあま子孫と後とてあ抽とて

親王と

親王は御

水はあつては川長と守守はあま子孫と後とてあ抽とて

大の辰重

あま子孫と後とてあ抽とて

源季長

風はあつては川長と守守はあま子孫と後とてあ抽とて

あま子孫と後とてあ抽とて

平親清女妹

あま子孫と後とてあ抽とて



也

平親清女

我らふひも存ひの清くを頼みは量り身もたふり  
輝きとよき約り

前系後忠定

むすむしきさういふ程の本もれはのちを  
夕暮

津守國助

そよひのやまの白雲の月まらふはつたふり  
影不念

藤原朝宗

風もよも吹くわさるの秋のまをけり  
空人法師

空人法師

予もあはれにきくと取りさやきつた掃きあは  
式乾門院清更

式乾門院清更

よもあはれにきくと取りさやきつた掃きあは  
寄風述懐とつるらんを

雅成親王

病もあはれとさあたるあるはれはあはれを  
秋のちりちり

前信信心道海

ひまひもあはれとさあたるあるはれはあはれを  
政長えの百を歌をけりた露

前大御云為家

病もあはれとさあたるあるはれはあはれを  
あ信心云物

あ信心云物

わらゆのたふいとみとけりまを起てあけはれ  
あ信心云物







む事けしそくしつひつ日あり昔はなほ秋也

源季廣

あはれこのつらき心なれ給ふは公らそくしつひ

津守國平

秋とてそめゆかむき境つしむるむら給ふ

法中良吉

そくしつひゆき月と心なれと秋なりそくし

常照井入道前太政大臣

そくしつひあつひの七午此如きまらえそみは月給

月乃事ひそくしつひゆき由とあひつらそくし

しつひゆき

井田伯

三建のむむひやあつそくしつひゆきそくしつひ

文永六年九月十三日白河を自国より入る

院月

後醍醐院法親王

我のそくしつひゆきそくしつひゆきそくしつひ

そくしつひ

よかんくしつひ

むむのそくしつひゆきそくしつひゆきそくしつひ

入道二京親王性助

今そくしつひゆきそくしつひゆきそくしつひ

静仁法親王

そくしつひゆきそくしつひゆきそくしつひ

順徳院法親王



秋乃此のをぬきしうまにあとのわら陰をすく

く免くしう典約を子一

初冬にいとせよ昔あつとわらうはこれ林のあつた

信実朝臣

きうらうと丸のせよあいにひる海を松乃松のしる

平松泰

わらうらうのりひまにあつととくはまやあつとあつ

入道二所親王世帥

わらうらうのまにけりしあつとあつとあつとあつ

文永五年九月十三日白河五輪交會し書し紙葉

後漢院院法書

わらうらう袖ととくねしう原のたうりあつとあつ

新しうす

袴中袖云云雄

わらうらうむら海のう袖とわらうとくあつとあつ

前袴信正教範

年とくあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつ

太田宗秀

くわらうたこのをこれのまにけりしあつとあつ

十月のひるあ合のまけりしあつとあつとあつとあつ

以筆のうらふは葉乃あつとあつとあつとあつとあつ

藤原為道朝臣

わらうらうあつとあつとあつとあつとあつとあつ



冬まじ申に

年惠法如

吹らじの本葉のしとこ乃養うそ凡ふまけぬを此海路  
藤原親範

冬川のせうのよとの水のよこし藤本葉乃り荒

前大信正忠源

うまめあやまき乃えは思そと方々世とわたりわら

右兵衛督基氏

うんまの書せ花とくおのなまゆりま乃え乃りお

白目あたたまりりこき千鳥

前大御之為世

和らりぬやむ代かぬくそと乃り七ふひの地をまじ

二十首乃りわら一斗くは浦を海

院少輔

わらせあいらのわらわは海をりしりま乃り乃り乃り

入道前大政大臣

浦をり乃り乃り乃り乃り乃り乃り乃り乃り乃り乃り

中務卿宗室親王家乃り乃り千鳥

前信正公朝

あぬそむの存乃り乃り乃り乃り乃り乃り乃り乃り乃り

乃り乃り乃り乃り乃り乃り乃り乃り乃り乃り乃り

乃り乃り乃り乃り乃り乃り乃り乃り乃り乃り乃り

從三位頼政



りて建てしむるははらりてむすのりて言はれん  
也

公所ゆゑに海よりりぬるにふりておぼえん  
前中油之名家なりて十九の里ありて中油  
為家といひぬ事ゆゑなりて君は知つるなり

備せし言をたてぬる海に世よりておぼえぬ  
也  
中油之名家

才えぬる言を今にたてぬるははらりて言  
也  
梅家仗實泰  
のりて言はれしむるははらりて言はれん

山家言といふ事とよはれり  
ぬ影法師

まはらりて言はれぬるははらりて言はれん  
也  
光後朝臣

海よりりぬる言はれぬるははらりて言はれん  
也  
法眼摩訶

なりて言はれぬるははらりて言はれん  
也  
藤原信光朝臣

久しき言はれぬるははらりて言はれん  
也  
中務少宗朝臣家乃百とよはれ

小書



わすらひ世のつらきことばをいふに  
此安んずる百首の歌あり

大津門入道由之旨

そのまじりたる年をいふに  
百首歌をいふに

藤原為朝臣

わすれ世のつらきことばをいふに  
年をいふに

神のまじりたる年をいふに  
年をいふに

新後撰和歌集卷第十八

雑歌中

かほろ歌をいふに

年中御言後也

あめつらき世をいふに

甚後

あめつらき世をいふに

此安んずる百首歌をいふに

二京法親王覚助

あめつらき世をいふに

入道二京親王性助

歌不記



さしめしめていふかき昔の神所なるに成儀の志は  
正安をき九月のころきあかたをそとむる時  
三七日の城梅こころいふふそとあはれき  
うらと申す所のむすり

法下憲基

おれらの腕にその時れと一帯りりそとあはれき

群らる

式乳門院清画

とまそと関つつけとあかき老の神あはれき

百首あまそとあはれき

法皇清書

あつたる神夜あつと腕の時りけの島乃歌

因居<sup>いんぐ</sup>初といぬ事とまそあはれき

る上天皇

かろとあはれきとまそあはれき

飛<sup>と</sup>のあはれき

遊義門院

あつたる神夜あつと腕の時りけの島乃歌

那智山の子白あつとあはれき

前大信<sup>まへ</sup>正道<sup>まへ</sup>瑜<sup>まへ</sup>

そとあはれきとまそあはれき

群らる

よかん人<sup>よかん</sup>りす

ねはあつたる神夜あつと腕の時りけの島乃歌



お形心くたころいまる人のきよにつるるをり

蓮生法師

わさるれまうねのまのわろとてむらひみとの音川あり

亥治百首あたたまりつるさした山家あり

前大御堂為氏

さまよふすれをせむし山家へけ梅の枝ありまきせく

山家の公を 式乾門院の画

あひのまればりあぬのねとさくかにはあられやえん

大寺門院清教

世ふきいらぬ時を山室がねの所とたてては海く

法皇の御書

はらさく邪がくむし山家の又日守の學を庭にねを

天台座を道玄新抄にすえりまうはしつり

やふ 前大御堂為氏

園まにつる公のまえあはむしりねの岩にねを

や 天台座を道玄

こころやびし此ののこころむらふ所の庭乃き凡

や 小見人志を

ね風の書はまうとや山室どうき母のねと人まをえん

津守困助

さうれ雲のねをかきぬとあはむしけき家の御書

小見人志を 在字法はイ



何れかたならぬことあるを以て考へし

前大御方為家

何れかたならぬことあるを以て考へし

百首ありて一付山家

天台宗の王道云

山家の事とていふは世の世の事なり

世の世

平泰時朝臣

世の世の事とていふは世の世の事なり

前信正實伴

世の世の事とていふは世の世の事なり

前信正實伴

世の世の事とていふは世の世の事なり

前信正實伴

世の世の事とていふは世の世の事なり

前信正實伴

世の世の事とていふは世の世の事なり

前信正實伴

世の世の事とていふは世の世の事なり

前信正實伴

世の世の事とていふは世の世の事なり

前信正實伴

世の世の事とていふは世の世の事なり

前信正實伴







いづれも

津守 函助

後人のみらゆき志の苦むいしりもその和氣傳ふ

好

親意法師

とれをわふと舟入のいさるるも此處をいづる人

弘安石の百をいさるるをてまうりて

入道 弁之政之長

昔も此處とはりのまむすもよめさるるわが御原

はつさる此のうろ世系後とのそみりそはる

守り

弁之御之為氏

わが御のひりむわのむり病の子はあむ孫とあむ

いづれ

法皇法師

わが御のひりむわのむり病の子はあむ孫とあむ

いづれ

弁之御之為氏

そら孫の親のいそめ守にむいあむむ孫とあむ

丹波長有親長

いそむを此處にそめ先親のいそむるはる

弘長三の由書百首うりて

弁之御言良教

いそむを此處にそめ先親のいそむるはる

連條の心をいそむる 豊原政秋

家乃凡そいそむるはるのそむるはる

源有長親長



風さびく所後ほど川田のよき心なるまきりあはるる  
前大信正意務まりりあひてせらりつらきる

前右近大將頼朝

わが心を後らつとてあはれとせしやを存せざる  
あふ信正意煩

そのいそゆきとてあはれ海をるるもあはれ

年々

合右京親王性助

諸般を浪たふふたふれらるるあはれあはれあはれ

由之旨

よまじり依保のあはれいりり後らるる是れはあはれ

右原齋房朝臣

指亦とのりりいりりいりりいりりいりりいりり  
系り改らるるいりりいりりいりりいりりいりり

前由之旨 宣

のりりいりりいりりいりりいりりいりりいりり  
いりりいりりいりりいりりいりりいりりいりり

あしき

民部卿賀良宣

うまにわたりてつれとてあはれいりりいりりいりり

未懐ふれり

前大御云教良

わが心なるあはれいりりいりりいりりいりり  
除目の朝尚侍藤原頼子朝臣いりりいりり

右上天皇







そのの世にうらふ公にまをたむる今よりいふ世

平久時

うらむたむる世にうらむる世にうらむる世に

権信正源

うらむる世にうらむる世にうらむる世に

新生法師

うらむる世にうらむる世にうらむる世に

前大畑之實家

うらむる世にうらむる世にうらむる世に

天台座主道玄

うらむる世にうらむる世にうらむる世に

平時氏

うらむる世にうらむる世にうらむる世に

法中園勇

うらむる世にうらむる世にうらむる世に

円道法師

うらむる世にうらむる世にうらむる世に

前右兼門僧基顯

うらむる世にうらむる世にうらむる世に

道洪法師

うらむる世にうらむる世にうらむる世に

法中定意

うらむる世にうらむる世にうらむる世に







藤原為信朝臣

わらわぬあひまゆ世のさとと世に教ふる程あり  
みまをの百首ありし時

入道前太政大臣

そとやつと成念をてきと我らとあむ世に  
神の原

大正忠成朝臣

あふまふまはるはれおひのまはる  
中臣 祐世

世とうらふふ教ふるのまはる  
平時村朝臣

あふまふまはるはれおひのまはる  
平時村朝臣

後之御之典約

あふまふまはるはれおひのまはる  
高階家成朝臣

あふまふまはるはれおひのまはる  
永福の源氏将

信眼能園

あふまふまはるはれおひのまはる  
永泰雅雅有

あふまふまはるはれおひのまはる  
後二位朝臣



何れも此の世に生れしを今に成る物と云ひて

梅窓使資平

新抄とあると又物と云ひて此の世に生れしを今に成る物と云ひて

金刺感久

そこの世に生れしを今に成る物と云ひて

良心法師

うま世と云ひて此の世に生れしを今に成る物と云ひて

静仁法師

世と云ひて此の世に生れしを今に成る物と云ひて

殿富門院右衛門

物と云ひて此の世に生れしを今に成る物と云ひて

梅窓使高定

あなれと云ひて此の世に生れしを今に成る物と云ひて

平時常

よせと云ひて此の世に生れしを今に成る物と云ひて

道法法師

よせと云ひて此の世に生れしを今に成る物と云ひて

心海上人

余と云ひて此の世に生れしを今に成る物と云ひて

守覚法師親王家の卒首言小述懐

寂蓮法師

うま世と云ひて此の世に生れしを今に成る物と云ひて



群一の巻

法中定為

七の歌も好む程をば身世のありはにや成程  
世のぬきはら百首ありて久しけり申に

前信正道性

後と心と志の程よりそふりう久し力に成りん  
百首ありてまうりてされ連懐

田大旨

けりやをばしりの名をば成はりて身も成りん  
不有心と

前大御云實家

と志の國の成程をばけりて久し力に成りん  
をら此山庄といのり成りてまうりて成り

空の山ありて久し

法中御言云雄

をばけりて久しりの山ありて久し力に成りん  
うばら程をくくる程の程の程をくくる程の程

成りて久し

山ありて久し程を成りて久し力に成りん

群一の巻

後醍醐院御製

道ありて久しりの事とて久し力に成りん  
普光園入道前室白左大臣

むらさき世のありて久し力に成りん  
百首ありてまうりて久し力に成りん

太上天皇



うそむいひおきさうなげく世の中にあやうあるを

うそむいひおきさうなげく世の中にあやうあるを 強きたふん

うそむいひおきさうなげく世の中にあやうあるを

うそむいひおきさうなげく世の中にあやうあるを

うそむいひおきさうなげく世の中にあやうあるを

うそむいひおきさうなげく世の中にあやうあるを

うそむいひおきさうなげく世の中にあやうあるを

うそむいひおきさうなげく世の中にあやうあるを

うそむいひおきさうなげく世の中にあやうあるを

うそむいひおきさうなげく世の中にあやうあるを

うそむいひおきさうなげく世の中にあやうあるを

新設撰和歌集卷第十九

雑歌下

雑歌下

前用白太政大臣

うそむいひおきさうなげく世の中にあやうあるを

うそむいひおきさうなげく世の中にあやうあるを

前大納言為家

うそむいひおきさうなげく世の中にあやうあるを

うそむいひおきさうなげく世の中にあやうあるを

天皇元孫道玄

うそむいひおきさうなげく世の中にあやうあるを

うそむいひおきさうなげく世の中にあやうあるを

前大信正源惠



たひ出のそまふふしあをあやふしむつひのついでに  
くえんくわん

かたふまはたそのついでにあやふしむつひのついでに

源兼氏朝臣

そらつるふしあやふしむつひのついでに

平政長

那とあやふしむつひのついでに

津守困助

あやふしむつひのついでに

藤原忠純

あやふしむつひのついでに

前右衛門言基朝臣

あやふしむつひのついでに

平初氏

あやふしむつひのついでに

法眼初濟朝臣まはるる結胎十二首中

前大信正朝臣

あやふしむつひのついでに

藤原忠資朝臣

あやふしむつひのついでに

くえんくわん

あやふしむつひのついでに



弘安元年百首一首の付

前系議雅有

世を去るはあまのつらきものなり

新不念

疾人ふ念

新あまの世かゝる身はあまのつらきものなり

法眼慶融

乃の世に世を去るはあまのつらきものなり

源通有朝臣

乃の世に世を去るはあまのつらきものなり

後藤道前用白老之旨

物とてなまの世を去るはあまのつらきものなり

前右衛門守基顯

乃の世に世を去るはあまのつらきものなり

法持信上之旨

乃の世に世を去る

あまの世に世を去る

乃の世に世を去るはあまのつらきものなり

乃の世に世を去る

あまの世に世を去る

乃の世に世を去るはあまのつらきものなり

高階基政朝臣

乃の世に世を去るはあまのつらきものなり

乃の世に世を去る

惟宗威長



自天降而集于岐山也  
世感之而祀之也

三條入道由之臣

神のちやまの神人かひてそらへん  
前大御言為成りたる也

行中御言云雄

力を移りては深きけり  
也

前大御言為成

平貞時朝臣のちやまの神  
生家のちやまをすつる也

前大御言為世

世移りては深きけり  
也

平宣時朝臣

自天降而集于岐山也  
也

平宣時朝臣

平宣時朝臣のちやまの神  
也

藤原宗徳

神のちやまの神人かひてそらへん  
也

法眼源兼

自天降而集于岐山也  
也

源親長朝臣



源邦長親の御事

後光厳天皇御即位

夏乃世海をきくはらに世移すことまわらば

源邦長親臣

乃乃の世に出る夏乃世にま心願をこころまの世

平親清女力海よりて約多しはもうらむ

典伯親子朝臣

よ我ふまきくへふ不とうる夏乃世を我のこころ

藤原為道朝臣

乃乃世の風をよきいんて我のこころ

道助は親王かられたる事は信正實瑜のこころ

源朝長

經系法師

彼いふ心と世の昔の袖かたあはれそよめ

性助は親王かられたる事は眼の所より

ゆけのふはらうらむ

道洪法師

今らとまらふ公の君とまらむと昔乃志

源朝長

典侍光子

かたはりの口もいんてまらむ物と我のこころ

基本田氏忠

なまらむ世もあやふしあはれなむらた友と

か將由の力海よりてはら佛事なる世より











後醍醐天皇の御代に於ては、  
山内康朝の御代に於ては、

後三位氏久

心より我の御代に於ては、  
昔より山内康朝の御代に於ては、  
ついでに、  
平親世

是の御代に於ては、  
有芳門院の御代に於ては、

大花の御代

落く心を、  
也、  
又、

又、

此乃以園の御代に於ては、  
後醍醐天皇の御代に於ては、

此乃以園の御代に於ては、  
後醍醐天皇の御代に於ては、

此乃以園の御代に於ては、  
後醍醐天皇の御代に於ては、

此乃以園の御代に於ては、  
後醍醐天皇の御代に於ては、

此乃以園の御代に於ては、  
後醍醐天皇の御代に於ては、

此乃以園の御代に於ては、  
後醍醐天皇の御代に於ては、

平時高

此乃以園の御代に於ては、  
後醍醐天皇の御代に於ては、

此乃以園の御代に於ては、  
後醍醐天皇の御代に於ては、

此乃以園の御代に於ては、  
後醍醐天皇の御代に於ては、

此乃以園の御代に於ては、  
後醍醐天皇の御代に於ては、



後醍醐院の御事此後飛山五内くませの事

法皇御製

奔命の御の儀と成るは御心にて御事成るは御心  
從一位御子此の御心にて御事成るは御心

後一条入道前宮白河宮

る御心と成るは御心と成るは御心と成るは御心

津守國平力御りて成るは御心

津守國助

力御りて成るは御心と成るは御心と成るは御心  
行中御心と成るは御心と成るは御心と成るは御心  
左の御心と成るは御心と成るは御心

前入信正良寛

うらむけりまの御心と成るは御心と成るは御心  
藤原為道朝臣弟三子にて結縁経依依の御心  
てふ御心と成るは御心と成るは御心

法下定為

かたてに御心と成るは御心と成るは御心  
東二条院御心と成るは御心と成るは御心  
と成るは御心と成るは御心と成るは御心  
常徳井入道前左政大臣

そとに御心と成るは御心と成るは御心  
東二条院御心と成るは御心



かきくろの海より形くす内とすうて林月の袖と座と所  
前大信正隆并月丈書書海より七の多國等  
結福程方とて今秋懐旧とて事と

前大徳之實冬

ゆりり金子のひん林月なろろとて西影とてひんひん  
安赤門波のひん見とてとての多の月丈と書藤  
為信和月方とてとてゆけと

前信正教範

ゆりり海のひんた地とてとて人の月をえゆん  
平時夜教とてもゆりふとて後方とて林とてと  
とてゆけと

平時範

ゆりり海のひんた地とてとて都乃月とてとてと

中右祐親

ゆりり海のひんた地とてとて都乃月とてとてと  
とてゆけと

法眼妙法

ゆりり海のひんた地とてとて都乃月とてとてと  
西園寺入道前とて政とてとてゆりてとてと  
井合とてとてとてとてとてとてとてと  
書とてとてと

山階入道尤とて

ゆりり海のひんた地とてとて都乃月とてとてと  
月丈書書海より七の多國等  
とてとてと

とてとてと



よりまゝに其の如くしるす月日祥事の事

從三位為後方まゝるとは後日教をそのまゝに

守るゝ 女孫<sup>子</sup>後大貳

早稲の如くき地をささげられたるの月日

源時長朝臣の如くしるす三年其の如く

源兼孝朝臣

別所の如くしるすの月日祥事の事

後醍醐院の如くしるす素服の如く

中原の實朝臣

かまじの如くしるすの月日祥事の事

性助法親王の如くしるす法眼の濟

つらつら 前大御之為氏

こしげの如くしるすの月日祥事の事

法眼の濟

その如くしるすの月日祥事の事

西の法師の如くしるすの事

前大御之成通

おどろの如くしるすの月日祥事の事

西の法師

おどろの如くしるすの月日祥事の事

藤原宗徳

その如くしるすの月日祥事の事

藤原宗徳



か將由約ありていさうす時此の事はしるべき  
信実約ありていさうす時此の事はしるべき

年田約

異行のなき二少の男を存するはつと母を母に  
子に人を養ふ人としてあつたはつた

道生法師

自ら若くしてなすはつたはつたはつたはつた  
京都府の事はつたはつたはつたはつた

前を政とす

あつたはつたはつたはつたはつたはつたはつた  
口はつたはつたはつたはつたはつたはつた

中務の宗子親王家の事

その事を知るはつたはつたはつたはつたはつた  
夏はつたはつたはつたはつたはつたはつた

待賢門院始行

この世はつたはつたはつたはつたはつたはつた  
あつたはつたはつたはつたはつたはつたはつた

大油を仰頼

あつたはつたはつたはつたはつたはつたはつた  
あつたはつたはつたはつたはつたはつたはつた  
あつたはつたはつたはつたはつたはつたはつた  
あつたはつたはつたはつたはつたはつたはつた

入道前を政とす



わが日のくちがさきさきとてあなをいひし神をた

群らるる ぬふはゆ

たれどかゝるる命とていひてはまの神をた

は下系雅

たれどかゝるる命とていひてはまの神をた

典信はゆ

たれどかゝるる命とていひてはまの神をた

たれどかゝるる命とていひてはまの神をた

たれどかゝるる命とていひてはまの神をた

たれどかゝるる命とていひてはまの神をた

たれどかゝるる命とていひてはまの神をた

法眼慶融

たれどかゝるる命とていひてはまの神をた

たれどかゝるる命とていひてはまの神をた

たれどかゝるる命とていひてはまの神をた

たれどかゝるる命とていひてはまの神をた

たれどかゝるる命とていひてはまの神をた

たれどかゝるる命とていひてはまの神をた

たれどかゝるる命とていひてはまの神をた



新後撰和歌集卷第十

賀正

百首ありまきりまのちの

後鳥羽院御製

飛の木の出立をたひの白雲の守りたりと云はれり  
以長を延百首歌之とてしゆりまのち

常盤井入道前太政大臣

天子の飛の木の御しせの世とありては飛の木の  
建仁二年冬御ありて池上松風とて建仁とてあり

せしむる

後鳥羽院前太政大臣

はなよりありてありてありてありてありてありてあり

西園寺入道前太政大臣とてはありてありてありてあり

はなよりありて

大御通方

中をまてありてありてありてありてありてありてあり

西園寺入道前太政大臣

ありてありてありてありてありてありてありてあり

はなよりありて

西行法師

ありてありてありてありてありてありてありてあり

鶴光筆とてありてありてありてありてありてあり

其後

ありてありてありてありてありてありてありてあり

ありてありて

大御通方







重の秋あけき月の秋とどかたは秋をたつて  
秋安んぬ八月の秋とどかたは秋をたつて

前右政大臣

君たはるの秋とどかたは秋をたつて

前右御座任

手せよかきぬ秋のたつて秋をたつて

元長三年九月十三日

月前祝

法皇御書

の秋とどかたは秋をたつて

秋安んぬ八月の秋とどかたは秋をたつて

院御書

と秋あけき月の秋とどかたは秋をたつて

手せよかきぬ秋のたつて

皇太后文太

の秋とどかたは秋をたつて

秋安んぬ八月の秋とどかたは秋をたつて

正三位家

と秋あけき月の秋とどかたは秋をたつて

手せよかきぬ秋のたつて

後深合前宮

の秋とどかたは秋をたつて

秋安んぬ八月の秋とどかたは秋をたつて

後深合前宮

と秋あけき月の秋とどかたは秋をたつて



市中西之定家より書けりて其の趣なり  
わが御心御心御心御心

西園寺入道前太政大臣

市中西之定家

たのむる言を考へてまじりて其の榮望の文ありて  
平時範のそなたの山居の事花散とて書てあり

藤原宗徳

るるをそ義成の山居の事とて其の言はきりて  
弘安元年百首歌をてまうりて

入道前太政大臣

水とすすめて其の事一舟の事とて其の言はきりて  
寄病祝言といふこと

太上天皇

わが御心御心御心御心  
弘安元年百首歌をてまうりて

法皇御書

今より入はる御心御心御心御心  
百首番ありて

藤原宗徳

浪の上より御心御心御心御心  
法皇御書  
はてして其の事とて其の言はきりて



遊義門院

此杖と平ととの事ありり子々の故の事なりき  
弘安八年三月從一位貞子九千坂たりをせ守り付  
より史の事なり  
照會殿入る事実白土守之旨  
多あり親本方むとこ此等の口許ありありあり

前用白丸大臣

半少ありありと考つた事ありり  
東二条院本にみえり事ありり  
より事ありり

右上天皇

百とせし事ありり  
院清製

秋の日の事ありり  
從一位貞子九千坂たりをせ守り付ありり

入道赤松大臣

代り親の事ありり  
後鳥羽院清時在る事ありり

津守燈國

百下此けかり事ありり  
嘉禎元年三月天嘗會書傳記事ありり

前中御之家光

神代よりありり  
寛元元年悠仁風俗事ありり



民部口經光

玉積かたふかき世をみる人乃山うき世をみる人  
正安三年悠紀風俗邦未考之上山

前中油言意仲

所本とあみる人此山の中をけくはるるなり

抄也所也

*Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including the characters "山" and "中".*



